

京都府埋蔵文化財情報

第95号

奈良岡遺跡再整理報告(1)―翡翠・ガラス製品―	大賀 克彦	1
	望月 誠子	
	戸根比呂子	
	小山 雅人	
平成16年度発掘調査略報		13
7. 大垣・一の宮・難波野条里制遺跡		
8. 岡ノ遺跡第3次		
9. 園部城跡第6次		
10. 諸畑遺跡第3次		
11. 時塚遺跡第8次		
12. 池尻遺跡第5次		
13. 案察使遺跡第6次		
14. 長岡京跡右京第829次・友岡遺跡		
15. 長岡京跡右京第830次・上里遺跡・井ノ内遺跡		
16. 薪遺跡第6次		
17. 片山遺跡第3次		
府内遺跡紹介 101. 高槻茶臼山古墳		35
長岡京跡調査だより・92		37
センターの動向		39

2005年3月

財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター

なぐおか 奈具岡遺跡再整理報告(1)―翡翠・ガラス製品―

大賀克彦・望月誠子・戸根比呂子・小山雅人

1. はじめに

京都府京丹後市弥栄町溝谷に所在する奈具岡遺跡は、丹後半島を北流する竹野川右岸の低丘陵上に立地し、小支谷をはさんだ奈具遺跡および中間の谷部にあたる奈具谷遺跡と一連の遺跡と考えられる。1971年の奈具遺跡の本格的な発掘調査以来、奈具岡遺跡群では、100基に達する住居跡や墓域が確認されており、弥生時代中期〔Ⅲ(新)期～Ⅳ期〕の拠点集落であることが明らかにされている。特に、奈具岡遺跡においては、1992年の第4次調査区では緑色凝灰岩製管玉の工房跡、1995年の第7・8次調査区では鉄器や水晶製玉類の工房跡が検出され、大いに注目された。両調査区は樹枝状に突き出す尾根をはさんで隣接するが、時期的には前者がⅢ(新)期、後者がⅣ期と異なり、行われた生産の内容の差異に対応している。

ここに報告するのは、奈具岡遺跡第4次および第7・8次調査^(注1)で出土した玉作り関係遺物の総括的再整理結果の一部である。この整理は、同遺跡出土品の重要文化財指定に伴い、出土遺物の観察・分類に基づく再収納と目録・コンテナ台帳の作成を目的として、平成15年11月25日から17年3月1日まで行った。当事業は、調査第2課総括調査員小山雅人を担当とし、京都大学の大賀克彦、大阪大学の望月誠子、東京大学の庄田慎矢が調査補佐員として、3名の整理員の協力を得て、上記の整理に従事した。その成果は現在、コンテナ48箱に分類・収納された出土遺物、報告済み資料の収蔵品目録とコンテナ台帳、そして1万点を超える未報告資料観察結果のエクセル・データとして、今後の広範な活用に備えている。

この総括整理(再整理)の副産物として、数篇のペーパーを用意しているが、第1回目として整理の方針と方法、および今回の再整理で観察・検討を行った、翡翠とガラスの製品について報告する。

2. 再整理の方針

今回、再整理を試みたのは、奈具岡遺跡第4次および第7・8次調査出土遺物として確認できた資料のほぼすべてである。実際の作業は、以下のように行った。

まず、予備的な確認作業の結果、出土資料は多数のコンテナに分割されていたが、収納状況は第4次調査分と第7・8次調査分とで若干異なっていることが判明した。第4次調査分に関しては、比較的、遺物が少量ずつ小分けされていたとともに、それらの多くに枝番号が与えられていた。この枝番号は、取り上げ番号であった可能性も考慮される。対して、第7・8次調査分につ

いては、多量の遺物が一括されている場合が多く、枝番号は与えられていなかった。また、個々の収納単位の中には、出土遺構の注記が失われているものも含まれていた。こうした状態のため、若干の混乱は免れていないと思われる。そこで、第4次調査分については前述の枝番号を活用し、第7・8次調査分については、同じコンテナの中の同じ容器に収納されていたという状態を記録できるよう、任意に仮の番号を与えた。ただし、一部のコンテナは、写真図版に掲載された資料を集めたものであったため、そうしたコンテナに混在した未掲載資料などには仮番号を与えていない。

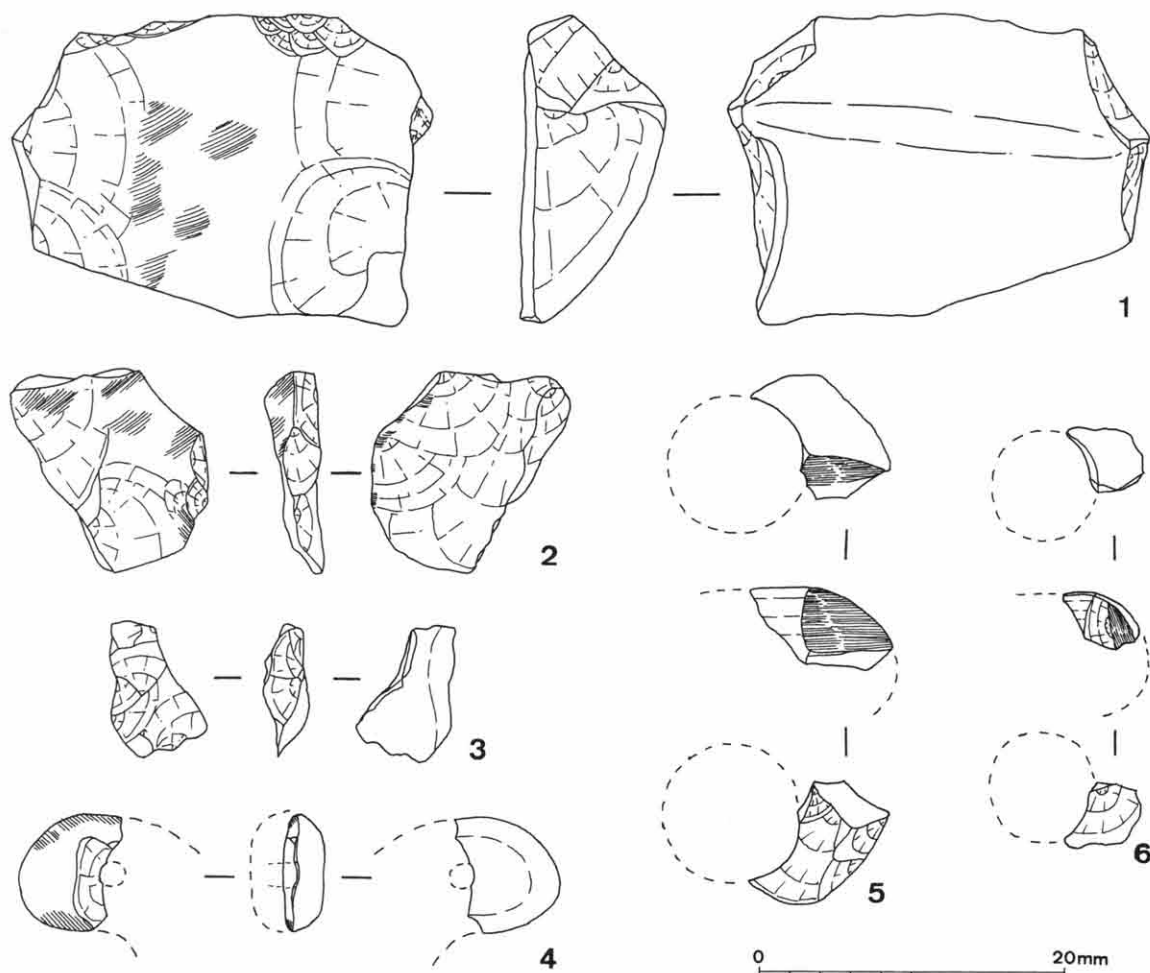
続いて、出土遺物の分類を行った。この際、重要文化財指定のために、写真図版に掲載された個体を本指定分として特定し、区別しておくこととなった。すなわち、第4次調査概報の図版第20～33の計325点と第7・8次調査概報の図版第41～58(1)の計707点である。ただし、第7・8次調査の図版第49には、他の図版と重複する個体が含まれ、実際の総数は696点である。また、第4次調査分および第7・8次調査分とも、再整理の対象となったコンテナには収納されていなかったか、微小な遺物のために現在のところ同定できていない個体が計9点存在する。

一方、概報の写真図版に掲載されなかった大半の資料に関しては、前述の収納単位を維持しつつ、材質や器種によって細別した。すなわち、「硬質緑色凝灰岩製管玉」「軟質緑色凝灰岩製管玉」「水晶製玉類」「ガラス製玉類」「安山岩製穿孔具」「瑪瑙製穿孔具」「珪化木製穿孔具」「石鋸」「鉄製品」「土器」「砥石」「石器・石片類」などである。こうした単位は、分類上、等価とはいえないが、量的な偏りのためにやむを得ないと判断した。また、材質と器種は密接に相関するが、転用などによる変則的な事例が存在することや、荒割されたのみの状態では目的器種が不確定であるために、分類上の扱いが不徹底となった部分がある。

最後に、第4次調査および第7・8次調査出土遺物に対して、それぞれ別に、最終的な収納のための遺物番号を付与した。すなわち、写真図版掲載資料に関しては、すべて個体ごとに別の番号とした。一方、写真図版に未掲載の資料に関しても、可能な限り個体ごとに別の番号を与えた。出土資料の大半を占める玉作関連資料の多くは微小なものであるが、今後の調査、活用を中心となることが予想されるので、工程的な特徴をよく示すものはすべて個体ごとに番号を与えてある。以上の作業の結果、第4次調査出土資料に関してはNo 1～2891、第7・8次調査出土資料に関してはNo 1～5667の計8558件となった。そのうち、前者のNo 1～325、後者のNo 1～707・5667は写真図版に掲載された資料である。内訳^(注2)に関しては付表1にまとめてある。

遺物台帳の作成後、あらためて資料の観察、注記を行った。緑色凝灰岩製管玉は望月誠子・庄田慎矢、穿孔具・鉄器は望月誠子、水晶製玉類・石器類ほかは大賀克彦が主に担当している。その際、概報に掲載された実測図との照合も試みた。ただし、写真図版として掲載された個体と実測図として掲載された個体は一致しない場合が多かった。写真図版に掲載された個体に関しては、微小な資料を除いて、実測図との照合をほぼ完了したが、実測図にのみ掲載された個体の特定は充分には行うことができなかった。

また、こうした作業の中で、概報の記述に対して、補足や修正が必要な点が確認された。そこ



第1図 奈具岡遺跡出土翡翠資料

で、新たに得られた知見について、順に報告していきたいと思う。

3. 翡翠製玉類

概報には全く記載がないが、細片類を観察する中で、6点の翡翠を確認した。まず、個々の資料の概要は以下のとおりである。

第4次調査No2816(第1図1)：竪穴式住居跡SH21中央土坑埋土出土。青灰白色を基調とした不透明な石材で、緑色部分は認められない。当該地域では、石器素材としては使用されない石材で、翡翠あるいは翡翠の類似品であると考えられる。転礫を打割した石核である。礫面を多く残す。剥離面は、一部研磨されている。

第7・8次調査No1905(第1図2)：竪穴式住居跡SH01出土。透明感に乏しいが、明るい緑色部分を含んだ翡翠である。小さな板状の剥片で、片面は比較的広く研磨されており、もう片面もごく一部が研磨されている。法量的には目的とする製品は不明である。

第7・8次調査No1906(第1図3)：竪穴式住居跡SH01出土。透明感に乏しいが、暗い緑色部分を多く含んだ翡翠である。小さな転礫を打割した剥片で、礫面を残す。

第7・8次調査No1907(第1図4)：竪穴式住居跡SH34出土。半透明で、明るい緑色部分を含

んだ翡翠である。勾玉の頭部から作出された剥片で、左図の左縁には孔壁と考えられる研磨面がわずかに認められる。剥離面も一部研磨されており、二次的な加工の意図は明確であるが、目的とする製品の形状は不明である。

第7・8次調査No1908(第1図5)：竪穴式住居跡S H34出土。透明感に乏しいが、明るい緑色部分を含んだ翡翠である。一部に孔壁面が確認でき、しかも孔口周辺に平坦部を持たないことから、丸玉から作出された剥片であると考えられる。孔口から放射方向に施溝痕が残り、丸玉を二次的に施溝分割したことは確実であるが、完存品を分割した確証はない。施溝分割後、孔に対して直交方向に打割している。

第7・8次調査No1909(第1図6)：竪穴式住居跡S H34出土。半透明で、明るい緑色部分を含んだ翡翠である。一部に孔壁面が確認でき、しかも孔口周辺に平坦部を持たないことから、丸玉から作出された剥片であると考えられる。丸玉の側面部分に施溝痕が残り、二次的に施溝分割したことは確実であるが、完存品を分割した保証はない。施溝分割後、孔に対して直交方向に打割している。

以上の資料のみからでは、目的器種や製作技法なども明確ではないが、次の点には注意しておきたい。まず、第4次調査No2816が翡翠であるならば、弥生時代に利用された翡翠素材としては比較的通有な大きさであるのに対して、第7・8次調査No1905およびNo1906は非常に小さな素材から作出されたと考えられる点である。また、第7・8次調査No1907～1909は、すべて竪穴式住居跡S H34から出土しており、いずれも完成品からの二次的な加工である点で共通する。これらは、偶発的に生じた欠損品を利用したのみとも考えられるが、次に述べるカリガラス製の小玉と同様に、完存品を取って二次的に加工した可能性を否定できない。

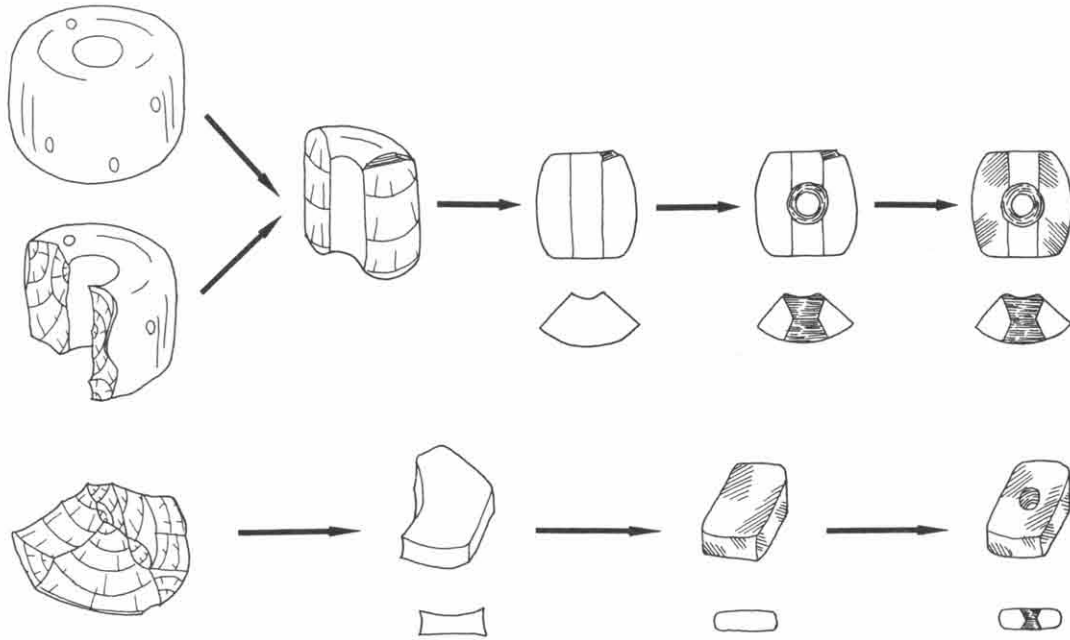
弥生時代においては、鉄器のように欠損品が素材として流通していたと考えられる場合や、石器のように偶発的に生じる欠損品を体系的に転用していくシステムが認められる場合のほかに、後期から終末期の東日本において普遍的にみられる金属製釧のように、二次的な加工と生産地からの財の移動が相関するよう^(注5)に見えるものなど、想定されている以上に財のライフサイクルは複雑である。こうした前提を踏まえて、既出の翡翠製玉類を再検討する中で、前述のような二次的な加工の評価も行う必要がある。

4. ガラス製玉類

(1)資料の概要

概報でも言及されているとおり、奈良岡遺跡の第7・8次調査ではガラス小玉の製作が確認されているが、十分な記載は行われていない。今回の再整理によって、総計80点のガラス製品を確認することができた。概要は付表2に示す。ガラスの材質、加工の有無や製作技法、目的器種から以下のように区分される。

a類：No636のみが相当する。材質はカリガラスと考えられ、コバルトで着色された紺色を呈する。二次的な加工を受けない唯一の完形品で、法量的にb類やc類よりも小型である。奈良岡



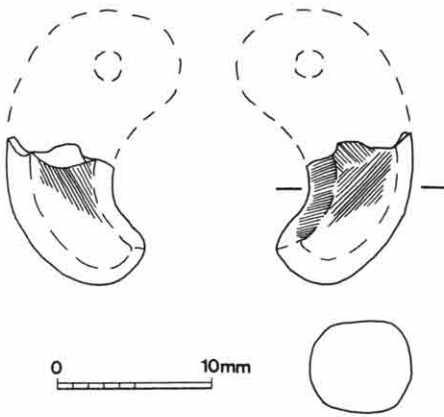
第2図 奈具岡遺跡出土ガラス製品の製作工程

遺跡におけるガラス玉の製作には、関連しない資料と判断する。

b類：b類には最も多くの資料が帰属し、計41点に達する。材質は銅で着色された淡青色を呈するカリガラスである。極めて微細ないくつかの資料を除けば、引き伸ばし法によって製作された小玉としての外面や孔壁の一部を残す一方で、あらたに意図的な分割や穿孔が行なわれており、加熱を伴わない二次的な加工によって特徴的な形状の小玉を製作していることがわかる。別稿でB P型としたものである。^(注6) 想定される製作工程を模式的に示した(第2図上段)。まず、素材として持ち込まれた段階での形状が、完存品であるか欠損品であるかは、製作の意義に関わる問題であるが、現状では判断が困難である。続いて、端面側から孔に並行する方向に分割が行なわれる。孔に直交する方向への分割は極めて稀である。分割は端面にあらかじめ施溝を行い、分割の失敗を防ぐことが多い。この施溝は、石製の管玉を製作する場合と比較して溝の幅が非常に狭く、溝壁が非常に荒れることから、石鋸ではなく鉄製工具を使用したと考えられる。本来のガラス小玉の1/2～1/4の大きさに相当するガラス片を作出したのち、今度は本来の孔に直交する方向で、孔と外面を結ぶように穿孔が行なわれる。孔の断面形は楕円状を呈する、明瞭な両面穿孔である。孔壁が非常に荒れることから、石針ではなく鉄製工具が使用されたと考えられる。ただし、奈具岡遺跡で大量に出土している針状の鉄器を使用した場合に、孔がこうした形状をなすかという点には疑問が残る。奈具岡遺跡では見出せなかったが、他遺跡から出土した類例には剥離面を研磨したものが認められる。

c類：No666・667が相当する。材質はカリガラスと考えられ、コバルトで着色された紺色を呈する。b類と同様な二次的加工によって製作された特徴的な小玉の未製品である。

d類：材質は銅で着色された淡青色を呈するカリガラスである。熱を受けて変形した不定形な形状を示すとともに、複数のガラス片が融着している。元のガラス片の表面は、酸化銅と思われる



第3図 奈具岡遺跡出土ガラス勾玉

る赤褐色の皮膜に覆われることが多い。個々のガラス片は完全にガラス化しているのに、小玉などが変形したものである可能性もあるが、孔などの痕跡を見出すことはできない。部分的に研磨を受けているものが存在するが、目的とする形状を示すような個体は存在しない。確認できた資料はすべて、何らかの玉を製作するには不十分な大きさである。

e類：No669・671・681が相当する。材質は銅で着色された淡青色を呈するカリガラスである。いずれも極めて微細な破片であるが、プライマリーな小玉の破片ではない

ことと、外面が平坦に研磨された立体に由来することを確認することができる。また、No681は穿孔時に生じた破損品であると考えられる。積極的に評価するならば、ガラス勾玉の製作に関連する資料と考えることができる。

f類：No1910が相当する(第3図)。材質は銅で着色された淡青色を呈するカリガラスである。形状的に勾玉の尾部であることは明らかである。内部には気泡が充満し、色むらも不規則であることから、二次的に成形されたガラス塊を素材とすることがわかる。すなわち、d類やe類が中間の工程を示す可能性もある。表面は完全に研磨されており、完成品であったと考えられる。胴部のほぼ中央で打割されているが、頭部側の状況は不明である。

g類：材質は緑色～青緑色を呈する鉛バリウムガラスである。未加工のガラスを素材として、加熱を伴わない製作技法によって小玉を製作している(第2図下段)。素材となるガラスは小型で不定形なものである。また、空隙に富み、また剥離面の発達に乏しい。不規則な分割を行って、小玉として適当な大きさとしたのち、表面を研磨する。ただし、表面の風化のために、研磨痕は明確ではない。最後に両面から穿孔を行って、完成させる。b類やc類と同様に両面穿孔で、孔は播鉢状を呈する。孔壁は激しく荒れており、石針による穿孔ではない。

(2)資料の出土状況

いずれも住居の覆土などから数点ずつ出土したものである。ガラス玉のような微細な遺物の埋没中における移動可能性などを考慮すれば、個々の住居に直接伴うとは判断し難いと考えられる。ただし、b類のガラスは、竪穴式住居跡S H56・57・59・64といった調査区の中央に入り込んだ谷の最奥部の住居跡に多く、一方、g類のガラスは、竪穴式住居跡S H34・39・46、d類のガラスは、竪穴式住居跡S H01・20・28といった谷の西側斜面の住居跡に偏って出土する。このように、ガラスの材質や加工方法の異同と、それぞれの分布が関連することから、ある程度は廃棄時のまとまりを保持している可能性が認められる。

(3)製品の流通

奈具岡遺跡出土のガラス製品として特に注目されるのは、特徴的な形状を呈する2種類のガラス小玉である。こうしたガラス小玉の製作は、初めて確認されたものである。消費地においては、

かなり古くから通有のガラス小玉を再加工した小玉の存在は知られていたが(伊東1954)、もっぱら偶発的に破損したガラス玉の再加工品として報告されてきた。しかし、偶然破損したものを利用したという評価は後述する類例の時間的なまとまりと不整合である。むしろ、奈具岡遺跡のように、こうした特徴的な形状の小玉が意図的に製作され、一定量が流通したと考えるほうが妥当であろう。そこで、管見に触れた類例を集成した(附表3)。

空間的には、一見して畿内を中心として分布することが明らかである。より東方の東海から東北に至るまでの地域でも少なからず見出される。一方、西方では福岡県高木7号土壙墓^(注7)が、管見に触れた唯一の例である。こうした分布上の偏りが発掘調査の頻度の差に起因するとは考え難く、むしろ北部九州などは墳墓の埋葬施設の検出が圧倒的に多いことから、こうした微細な遺物の検出には有利な条件を備えていると思われる。とすれば、今後も、現在まで調査件数の比較的になかった東方の地域で、より多く類例が増加すると予測される。畿内を中心とし、その東方の地域にやや散在して分布するという状況は本来の様相を示していると考えられるのである。

出土時期に関しては、包含層出土のものや墓壙から出土しても共伴遺物を伴わないものも多く、若干の検討を要する^(注8・9)。しかし、中期後葉よりも確実に遡る資料が存在しない点、および分布の中心となる近畿地方およびその周辺では、時期が特定される資料のすべてが中期後葉～後期初頭に集中する点は一見して明らかである。奈具岡遺跡において同種のガラス小玉の製作が行なわれた時期とよく対応するのである。すなわち、これらの資料に関しては、奈具岡遺跡で製作されたガラス小玉が流通したものである可能性を否定できない。

一方、散発的な出土がみられるに過ぎないより東方の地域では、様相は若干異なっている。現状では、積極的に中期に遡る可能性を指摘できる資料は岩手県常磐広町遺跡例^(注10)に限られ、むしろ後期中葉以降に特定される資料が顕著である。もちろん、今後資料が増加すれば、中期に遡る例も見出せると思われるが、全体的な傾向は同様であろう。一方で、当該地域出土のこれらのガラス小玉も、素材となる淡青色のカリガラスの小玉は端面が研磨されていないものであることや、後期後半以降に盛行する紺色で大型のカリガラスの小玉が素材として利用されないことから、その製作時期は少なくとも後期前半までに限定される。この点では、近畿地方周辺と相違はないのである。ということは、当該地域出土のこれらのガラス小玉に関しては、製作から廃棄までの間に比較的長期間にわたる時間の経過が見込まれるが、さらなる分析は今後の課題である。

(4)小 結

弥生時代から古墳時代の日本列島においては、多様なガラス製品が相当量流通している。しかし、それらの多くは、製品として日本列島へと搬入されたものである。勾玉や一部の管玉に関しては列島内での製作が推定されるが、その具体的な痕跡としては、鋳型などが断片的に知られている程度であった。そうした中、奈具岡遺跡は、貴重な例を加えたこととなる。そして、奈具岡遺跡におけるガラス小玉の生産に対しては、次のような点に注目すべきである。

第一に、その弥生時代中期後葉という時期である。北部九州では弥生時代前期末にはすでにガラス玉の流入が認められるが、本州への流入が始まるのは中期後葉以降であり、しかも後期初頭

の突発的な増加以降に比べると極めて微量に過ぎない。そのような時期に、早くもガラス玉の加工が行われているのである。

第二に、その製作技法である。すなわち、ガラスという新出の素材に対して、熱の利用というその特性を活かした技術を採用しないからである。とはいえ、素朴な発展段階論的に初期の技術的未熟さを言い当てるのは適切ではない。奈具岡遺跡における製作は确实とはいえないが、勾玉に関しては確実に熱を利用した加工が行われているからである。奈具岡遺跡におけるガラス小玉の製作技法は、合理的に選択されたものなのである。

第三に、製品の流通である。さまざまな財は、一般的に周辺に対して不均等に流通していくが、奈具岡遺跡において生産されたガラス小玉はその実例を追加したこととなる。また、流通先によって、廃棄に至るまでの過程が異なる可能性が示唆されたことは、弥生時代における財の流通の持つ意味に迫る視点となるものである。

5. 結語

本稿では、まず、奈具岡遺跡出土資料を再整理することとなった経緯と概要について記しておいた。また、その過程において注目された資料群の中で、翡翠製玉類とガラス製玉類に関して、若干の検討を行った。今後は、出土資料の中心となる緑色凝灰岩製管玉、水晶製玉類、もしくはそれらの製作に使用された穿孔具などについても再検討を行い、奈具岡遺跡において行われた活動の実態に迫りたいと思う。

(おおが・かつひこ＝独立行政法人文化財研究所奈良文化財研究所特別研究員)

(もちづき・せいこ＝大阪大学大学院院生)

(とね・ひろこ＝京都大学文学部学生)

(こやま・まさと＝当センター調査第2課総括調査員)

謝辞 本稿の作成においては、関連資料を保管する各機関において資料の調査と、場合によっては未報告資料の使用に対して、格別の御配慮を頂きました。また、肥塚隆保(独立行政法人文化財研究所奈良文化財研究所)および小暮律子(元京都大学大学院生)の両氏には、奈具岡遺跡出土ガラス玉の理化学的分析の結果などに関して、貴重な御意見を頂きました。文末になりましたが、あらためて御礼申し上げます。

注1 田代弘・増田孝彦・河野一隆「奈具岡遺跡(第4次)」(「丹後国営農地開発事業(東部・西部地区)関係遺跡昭和63年度、平成3・4年度発掘調査概要」『京都府遺跡調査概報』第55冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1993; 河野一隆・野島永「奈具岡遺跡(第7・8次)」(「国営農地(東部・西部地区)関係遺跡平成8年度発掘調査概要」『京都府遺跡調査概報』第76冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1997。現在までの奈具遺跡群の発掘調査については、筒井崇史「位置と環境」『過去の調査』(「奈具岡遺跡第9次発掘調査概要」『京都府遺跡調査概報』第87冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1999、に手際良くまとめられている。

- 注2 第7・8次調査分のNo5667は、重要文化財指定のために独立させた中には含まれていないが、写真は図版58(2)に掲載されている。
- 注3 野島永「破碎した鑄造鉄斧」『たたら研究』第32・33号 1992
- 注4 土屋みづほ「市田斉当坊遺跡における石器製作」『市田斉当坊遺跡』（『京都府遺跡調査報告』第36冊（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター）2004
- 注5 白居直之「再生される銅釧—帯状円環型銅釧に関する一視点—」（『長野県埋蔵文化財センター紀要』8）2000
- 注6 大賀克彦「日本列島におけるガラス小玉の変遷」（『小羽山』『清水町埋蔵文化財発掘調査報告書』V）2002
- 注7 高木7号土壙墓は隣接する土壙墓から石鏃などが出土することから中期前半に比定されているが、十分な根拠とはいえず、中期後葉まで降る可能性を否定することはできない。
- 注8 兵庫県七戸市195号木棺墓は重複する住居跡の時期との兼ね合いから、消極的ではあるが報告者は後期に比定している。しかし、共伴する、もしくは隣接する他の木棺墓から出土する石製の玉類はすべて中期に特有の種類であることから、やや遡る時期を考える方がよいように思われる。
- 注9 鳥取県川上74号墳および岐阜県花岡山5号墳は、古墳時代でも後期後半以降と突出して時期が降る資料であり、また素材となり得るガラスが基本的に流通していない時期でもあるので、明らかな伝世品として除外することができる。ちなみに、兵庫県豊岡市大師山5号墳からも、一見、前述の二次的に加工されたガラス小玉に類似するものが出土している。しかし、当該資料は、素材が紺色透明で大型のソーダガラス？を素材とすることや、本来の小玉を側面から打割する点で相違が認められることから、ここでは関連しないものと判断している。
- 注10 常磐広町遺跡例は天王山式の古相を示す土器を共伴しており、一般的には後期前半を前後する時期に比定される。しかし、共伴する管玉はやはり中期後葉の組み合わせであるので、少なくとも当地への流入は中期に遡ると考えている。

付表3の出典

1. 伊東信雄 1954「岩手縣佐倉河發見の彌生式遺跡」『古代学』第3巻第2号
2. 富津市・財団法人君津郡市文化財センター 1992『打越遺跡・神明山遺跡』（『財団法人君津郡市文化財センター発掘調査報告書』第64集）
3. 浦和市遺跡調査会 1992『大久保領家片町遺跡発掘調査報告書(第1地点)』（『浦和市遺跡調査会報告書』第163集）
4. 日本鉄道建設公団北陸新幹線建設局・長野市・長野県教育委員会・（財）長野県埋蔵文化財センター 1998『北陸新幹線埋蔵文化財発掘調査報告書4』（『（財）長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書』33）
5. 財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所 1996・97『北神馬土手遺跡 他I』（『静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告』第74集）
6. 財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所 1997『北神馬土手遺跡 他II』（『静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告』第89集）
7. 大垣市教育委員会 1992『花岡山古墳群』（『大垣市埋蔵文化財調査報告書』第1集）
8. 財団法人愛知県教育サービスセンター愛知県埋蔵文化財センター 2001『川原遺跡』（『愛知県埋蔵文化財センター調査報告書』第91集）

9. 三重県埋蔵文化財センター 2000『長遺跡発掘調査報告』（『三重県埋蔵文化財調査報告』115-9）
10. 田原本町教育委員会 1984『唐古・鍵遺跡 黒田大塚古墳』（『田原本町埋蔵文化財調査概要』2）
11. 田原本町教育委員会 1989『唐古・鍵遺跡』（『田原本町埋蔵文化財調査概要』11）
12. 永島暉臣・田中清美 1985「大阪市加美遺跡の弥生時代中期墳丘墓」『月刊文化財』No266
13. 大阪府教育委員会・財団法人大阪府文化財調査研究センター1998『河内平野遺跡群の動態Ⅳ』
14. 枚方市文化財研究調査会 1996『枚方市文化財年報』16
15. 大宮町教育委員会 2001『左坂古墳(墳墓)群G支群』（『大宮町文化財調査報告』第20集）
16. 兵庫県教育委員会 1996『玉津田中遺跡 第5分冊』（『兵庫県文化財調査報告』第135-5冊）
17. 出田直 1997「播磨出土の弥生中期後半のガラス玉の一例」『伊達先生古稀記念 古文化論叢』
18. 兵庫県教育委員会 1990『七日市遺跡(Ⅰ)』（『兵庫県文化財調査報告書』第72冊）
19. 津山市教育委員会 1985『西吉田遺跡』（『津山市埋蔵文化財発掘調査報告』第17集）
20. 倉吉市教育委員会 2002『高原遺跡発掘調査報告書』（『倉吉市文化財調査報告書』第113集）
21. 東郷町教育委員会 1994『川上73号・74号墳発掘調査報告書』（『東郷町文化財報告書』第10集）
22. 徳島県教育委員会・財団法人 徳島県埋蔵文化財センター・建設省四国地方建設局 1995『名東遺跡』（『徳島県埋蔵文化財センター調査報告書』第14集）
23. 福岡県教育委員会 1977『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告ⅩⅢ』

付表1 奈良岡遺跡出土資料件数内訳

	第4次調査分			第7・8次調査分			
	図版20～33		未掲載	図版41～58			未掲載
	総数	未確認	総数	総数	未確認	重複	総数
土器	22		53	20	1		97
硬質緑色凝灰岩管玉	30		487	40			298
軟質緑色凝灰岩管玉	35		791	2			51
水晶玉類	23		110	266	2	11	3372
翡翠玉類	0		1	0			5
安山岩穿孔具	59	3	642	4			147
瑪瑙穿孔具	87		282	30			291
珪化木穿孔具	0		5	37			227
石鋸	24		100	0			33
砥石	21		35	8			37
石器・石片類	24	2	52	23			113
ガラス玉類	0		0	72			8
鉄器	0		5	205	1		273
青銅他	0		0	1			2
有機物	0		3	0			5
計	325	5	2566	708	4	11	4959

付表2 奈良岡遺跡第7・8次調査出土ガラス製品

番号	図版番号	素材	器種	分類	工程	遺存状況	出土遺構
636	58(1)	1 カリ(紺)	小玉	a類	完成品	完存	SH34
637	58(1)	2 カリ(淡青)	不明	d類	小片融着		SH57 下層
638	58(1)	3 カリ(淡青)	小玉	b類	穿孔	1/2→半裁	SH57 下層
639	58(1)	4 カリ(淡青)	小玉	b類	分割	1/4	SH57 下層
640	58(1)	5 カリ(淡青)	不明	d類	小片融着		SH57 下層
641	58(1)	6 カリ(淡青)	小玉	b類	穿孔	1/3→半裁	SH57
642	58(1)	7 カリ(淡青)	小玉	b類	穿孔	1/2→半裁	SH57
643	58(1)	8 カリ(淡青)	小玉	b類	分割	1/4	SH57
644	58(1)	9 カリ(淡青)	小玉	b類	穿孔	1/4→半裁	SH57

645	58(1)	10	カリ(淡青)	小玉	b類	分割	小片	SH57
646	58(1)	11	カリ(淡青)	小玉	b類	分割	1/4→半裁	SH57
647	58(1)	12	カリ(淡青)	不明	d類	小片融着		SH57
648	58(1)	13	カリ(淡青)	小玉	b類	分割	小片	SH57
649	58(1)	14	カリ(淡青)	小玉	b類	穿孔	1/4→半裁	SH57
650	58(1)	15	カリ(淡青)	小玉	b類	穿孔	1/4→半裁	SH57
651	58(1)	16	カリ(淡青)	小玉	b類	穿孔	1/4→半裁	SH57
652	58(1)	17	カリ(淡青)	小玉	b類	穿孔	1/4→半裁	SH57
653	58(1)	18	カリ(淡青)	小玉	b類	分割	1/4	SH64
654	58(1)	19	カリ(淡青)	小玉	b類	穿孔	1/4→半裁	SH64
655	58(1)	20	カリ(淡青)	小玉	b類	穿孔	1/4→半裁	SH64
656	58(1)	21	カリ(淡青)	小玉	b類	穿孔	1/4→半裁	SH64
657	58(1)	22	カリ(淡青)	小玉	b類	穿孔	1/4→半裁	SH64
658	58(1)	23	カリ(淡青)	小玉	b類	穿孔	1/4→半裁	SH64
659	58(1)	24	カリ(淡青)	小玉	b類	穿孔	1/4→半裁	SH64
660	58(1)	25	カリ(淡青)	小玉	b類	穿孔	1/4→半裁	SH64
661	58(1)	26	カリ(淡青)	小玉	b類	穿孔	1/4→半裁	SH64
662	58(1)	27	カリ(淡青)	小玉	b類	穿孔	1/4→半裁	SH64
663	58(1)	28	カリ(淡青)	小玉	b類	穿孔	1/4→半裁	SH64
664	58(1)	29	カリ(淡青)	小玉	b類	穿孔	1/4→半裁	SH64
665	58(1)	30	カリ(淡青)	小玉	b類	分割	1/4	SH01 第6層
666	58(1)	31	カリ(紺)	小玉	c類	穿孔	1/2→半裁	SH34
667	58(1)	32	カリ(紺)	小玉	c類	穿孔	1/2→半裁	SH34
668	58(1)	33	鉛バリウム	小玉	g類	穿孔	半裁	SH34
669	58(1)	34	カリ(淡青)	不明	e類	研磨	小片	SH34
670	58(1)	35	カリ(淡青)	小玉	b類	穿孔	1/4→半裁	SH34
671	58(1)	36	カリ(淡青)	不明	e類	研磨	小片	SH34
672	58(1)	37	鉛バリウム	小玉	g類		小片	SH34
673	58(1)	38	鉛バリウム	小玉	g類	穿孔	小片	SH34
674	58(1)	39	鉛バリウム	小玉	g類		小片	SH34
675	58(1)	40	鉛バリウム	小玉	g類		小片	SH39
676	58(1)	41	カリ(淡青)	不明	d類	小片融着	小片	SH39
677	58(1)	42	鉛バリウム	小玉	g類		小片	SH39
678	58(1)	43	鉛バリウム	小玉	g類	穿孔	半裁	SH39
679	58(1)	44	鉛バリウム	小玉	g類		小片	SH46
680	58(1)	45	カリ(淡青)	小玉	b類	分割	1/2	SH46
681	58(1)	46	カリ(淡青)	勾玉?	e類	穿孔	小片	SH46
682	58(1)	47	カリ(淡青)	小玉	b類	分割	1/4→半裁	SH56
683	58(1)	48	カリ(淡青)	小玉	b類	分割	1/4→半裁	SH56
684	58(1)	49	カリ(淡青)	不明	d類	小片融着		SH01
685	58(1)	50	カリ(淡青)	小玉	b類	分割	1/4→半裁	SH01
686	58(1)	51	鉛バリウム	小玉	g類	穿孔	半裁	SH01
687	58(1)	52	カリ(淡青)	小玉	b類	分割	小片	SH01
688	58(1)	53	カリ(淡青)	小玉	b類	分割	小片	SH01
689	58(1)	54	鉛バリウム	小玉	g類		小片	SH01
690	58(1)	55	カリ(淡青)	不明	d類?	小片融着?	小片	SH20
691	58(1)	56	カリ(淡青)	不明	d類	小片融着	小片	SH20
692	58(1)	57	カリ(淡青)	不明	d類?	小片融着?	小片	SH20
693	58(1)	58	カリ(淡青)	不明	d類?	小片融着?	小片	SH20
694	58(1)	59	カリ(淡青)	小玉	b類	穿孔	1/4→半裁	SH01-33
695	58(1)	60	カリ(淡青)	不明	d類	小片融着		SH28
696	58(1)	61	カリ(淡青)	不明	d類	小片融着		SH28
697	58(1)	62	カリ(淡青)	不明	d類	小片融着		SH28
698	58(1)	63	カリ(淡青)	不明	d類	小片融着		SH28
699	58(1)	64	カリ(淡青)	不明	d類	小片融着		SH28
700	58(1)	65	カリ(淡青)	不明	d類	小片融着		SH28
701	58(1)	66	カリ(淡青)	不明	d類	小片融着		SH08-32
702	58(1)	67	カリ(淡青)	小玉	b類	穿孔	1/4→半裁	SH59
703	58(1)	68	カリ(淡青)	不明	d類	小片融着		SH20
704	58(1)	69	カリ(淡青)	小玉	b類	分割	小片	SH20
705	58(1)	70	カリ(淡青)	不明	d類	小片融着		谷部試掘

706	58(1)	71	カリ(淡青)	小玉	b類	穿孔	1/4→半裁	谷部試掘
707	58(1)	72	カリ(淡青)	小玉	b類	穿孔	1/4→半裁	谷部試掘
1910	-	-	カリ(淡青)	勾玉	f類	分割	尾部	SH61?
1911	-	-	カリ(淡青)	小玉	b類	穿孔	半裁	SH57 下層ピット
1912	-	-	カリ(淡青)	小玉	b類	穿孔	小片	SH57 下層ピット
1913	-	-	カリ(淡青)	小玉	b類	穿孔	小片	SH64 床面
1914	-	-	カリ(淡青)	不明	d類	小片融着	小片	SH34 床面
1915	-	-	鉛バリウム	小玉	g類		小片	SH01
1916	-	-	鉛バリウム	小玉	g類	穿孔	小片	SH28
1917	-	-	鉛バリウム	小玉	g類		小片	SH39

付表3 B P型小玉出土地一覧

遺跡	都道府県	市町村	時期	鉛バリウム	カリ(淡青色)	カリ(紺色)	備考	文献
常磐広町遺跡土壙墓	岩手県	水沢市	V前半		2			1
打越遺跡12W-32グリッド	千葉県	富津市	不明		1			2
大久保領家片町遺跡G-12グリッド	埼玉県	浦和市	不明		1			3
篠ノ井241・242号周溝墓(1)	長野県	長野市	V中葉~VI		1			4
北神馬土手遺跡3号方形周溝墓	静岡県	沼津市	V後半~VI		2			5・6
愛野向山遺跡「B10号墳」	静岡県	袋井市	V後半~VI		5	1		
花岡山5号墳	岐阜県	大垣市	古墳後IV		2			7
川原遺跡98調査区IXD9sグリッド	愛知県	豊田市	不明		1			8
長遺跡4号住居	三重県	多気郡明和町	IV	1				9
唐古遺跡19次101号土坑	奈良県	磯城郡田原本町	IV末~V初頭	1				10
唐古遺跡33次包含層	奈良県	磯城郡田原本町	不明		1			11
唐古遺跡37次2103号土坑	奈良県	磯城郡田原本町	不明	2				
加美遺跡Y-1号墳丘墓(1)	大阪府	大阪市	IV	1				12
巨摩・瓜生堂遺跡2号方形周溝墓(10)	大阪府	東大阪市	V初頭		13		3点は半裁・穿孔なし	13
長尾谷町遺跡2次2号住居	大阪府	枚方市	IV		6			14
長尾谷町遺跡3次2号住居	大阪府	枚方市	IV		1			14
左坂遺跡14号墓(3)	京都府	中郡大宮町	V初頭		2			15
玉津田中遺跡46151号土坑	兵庫県	神戸市	不明		1			16
長法寺遺跡木棺墓	兵庫県	加西市	中期		3			
上大明地遺跡竪穴住居	兵庫県	神崎郡福崎町	IV		1			17
七日市遺跡195号木棺墓	兵庫県	水上郡春日町	IV	1				18
西吉田遺跡B区3号木棺墓	岡山県	津山市	IV		3			19
高原遺跡3号住居	鳥取県	倉吉市	IV		1			20
川上74号墳	鳥取県	東伯郡東郷町	古墳後III~IV		1		背面側も研磨	21
名東遺跡2004号住居	徳島県	徳島市	IV		1			22
高木遺跡D-7号土壙墓	福岡県	鞍手郡鞍手町	中期	7				23

7. おおがき いちのみや なんばの 大垣・一の宮・難波野条里制遺跡

所在地 宮津市字大垣・難波野地内

調査期間 平成16年9月15日～平成17年2月17日

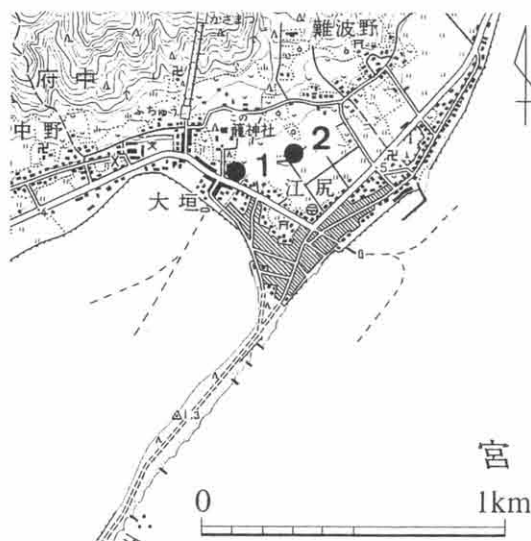
調査面積 約1,500m²(大垣遺跡：200m²、難波野条里制遺跡：1,300m²)

はじめに この調査は、国道178号線府中道路(通称「府中バイパス」)新設改良事業に先行して、京都府土木建設部の依頼を受けて、平成14年度から継続して実施している発掘調査および試掘調査である。大垣遺跡・一の宮遺跡・難波野条里制遺跡は、景勝地天橋立の北端、成相山系と宮津湾・阿蘇海に挟まれた狭小な平野部に位置している。この地域はかつて府中と呼ばれ、古代丹後の中心地として栄え、雪舟等楊が「天橋立図」に描いたところとして有名である。

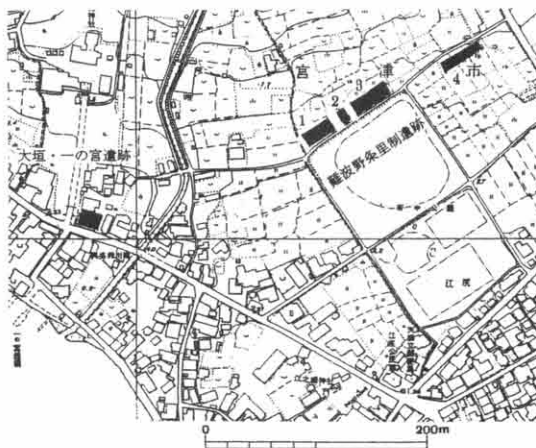
難波野条里制遺跡

進入路を確保した後、1～4トレンチの4か所のトレンチを設定した。

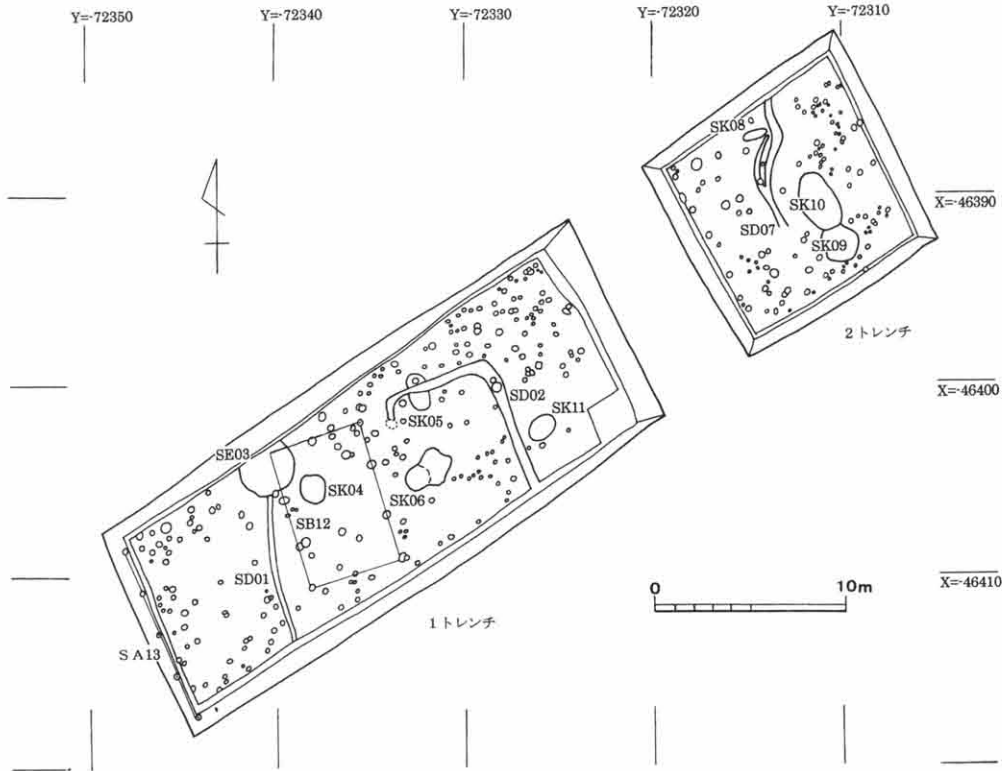
1トレンチ 古墳時代中期を中心とした遺物包含層を掘り込んだ平安時代後期～中世の縦板組井戸S E 03、掘立柱建物跡S B 12や多数の柱穴・溝・土坑などを検出している。古墳時代の遺物包含層からは、土師器高杯などの多量の土器のほか、手づくね土器・管玉・小玉・有孔円盤(ボタン形)・紡錘車などが出土している。井戸S E 03は、直径約3mの掘形の中央に縦板組横棧止めの井戸枠を設置した井戸である。井戸枠内から12世紀後半の土器が出土している。溝S D 02は、方形にめぐる溝で幅50～80cm、深さ20cm前後を測る。12世紀後半の土器が出土している。掘立柱建物跡S B 12は、井戸S E 03が埋没した後に建てられた2間×3間、柱間は約2.5m等間隔の建物跡である。柱穴の一つに柱根が残っていた。トレンチ西端で掘立柱建物跡S B 12とよく似た方向の杭列S A 13



第1図 調査地位置図(国土地理院1/25,000宮津)
1：大垣・一の宮遺跡 2：難波野条里制遺跡



第2図 トレンチ配置図



第3図 難波野条里制遺跡第1・2トレンチ平面図

を検出している。杭間は約2.5m等間隔である。

2トレンチ 1トレンチと同様の遺物包含層があり、平安時代後期～中世の多数の柱穴・土坑を検出している。多数の柱穴が建物跡としてまとまるかどうかは検討中である。砂礫面で古墳時代中期の土器が出土する溝SD07を検出している。

4トレンチ トレンチ中央から西側で多数の柱穴を検出している。トレンチ東端では50cm以上の礫を含む土石流の堆積層を検出し、この堆積層から古墳時代中期の遺物や奈良時代～中世の土器・渡来銭などが出土している。

大垣・一の宮遺跡

大垣・一の宮遺跡ではトレンチ1か所を設定した。腐植土などが堆積する湿地状部分から箸・曲物底板、青磁椀・土師器皿・土師器台付皿などが出土している。

まとめ 条里制に関連する遺構は検出していないが、平安時代後期～中世の井戸や建物跡、多数の柱穴を検出していることから、集落跡であることが判明した。集落は調査地点から西方の真名井川付近まで広がっている可能性が高い。現在の真名井川は、真名井神社から籠神社の東側を通り阿蘇海に注いでいるが、中世以前は真名井神社から府中公園を通り宮津湾に注ぐ最短距離を流れ、何度も氾濫を起こしていたことが堆積層の観察から判明した。大量の古墳時代の遺物の存在から、今回の調査地点から真名井神社の間に集落が存在していたと推定される。また、管玉・小玉・有孔円盤・土製勾玉・手づくね土器などが出土していることから、周辺に祭祀に関連する遺構が存在していた可能性が高い。

(石尾政信)

8. おかの岡ノ遺跡第3次

所在地 福知山市東岡町・南岡町地先
 調査期間 平成16年5月13日～平成17年1月28日
 調査面積 約3,980m²

はじめに 岡ノ遺跡は、福知山市の市街地の南方にある台地上に位置する遺跡である。

平成12年度に、今回の調査地に隣接する地点で福知山市教育委員会により第1次調査(480m²)が行われ、弥生時代の墳墓および古墳時代や中世の集落跡が確認された。さらに昨年度の当調査研究センターが実施した第2次調査(1,785m²)によって、弥生時代の溝や竪穴式住居跡、弥生時代末～古墳時代初頭にかけての竪穴式住居跡・掘立柱建物跡、平安時代の遺構・遺物などの分布が明らかになった。

今年度は、遺跡の西側の17地点で、遺構・遺物の分布密度や遺存状況を確認するための試掘調査を実施し、東側の3地点(1～3地区)では、昨年度の調査成果に基づき発掘調査を実施した。

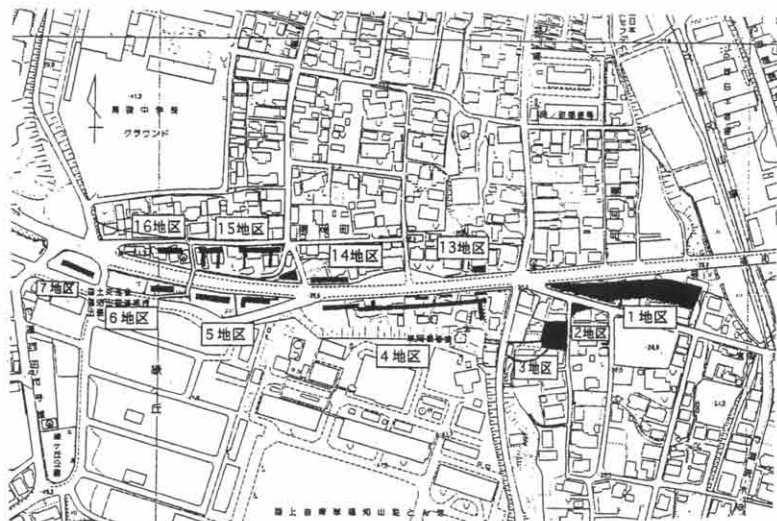
調査の概要

1地区 弥生時代後期の遺構は、調査地の西寄りで一辺約9mの方形周溝墓1基を検出した。弥生時代末～古墳時代初頭の遺構は、調査地の西寄りと中央部で、一辺約3.5mの竪穴式住居跡を2基検出した。江戸時代前期の遺構は、調査地中央部の里道の下層から、幅約3m、深さ約2mの堀跡を検出した。溝の断面形は「V」字形をしている。江戸時代中期の遺構としては、調査地の東・中央・西側で、直径約1m、深さ3m以上の井戸3基を検出した。

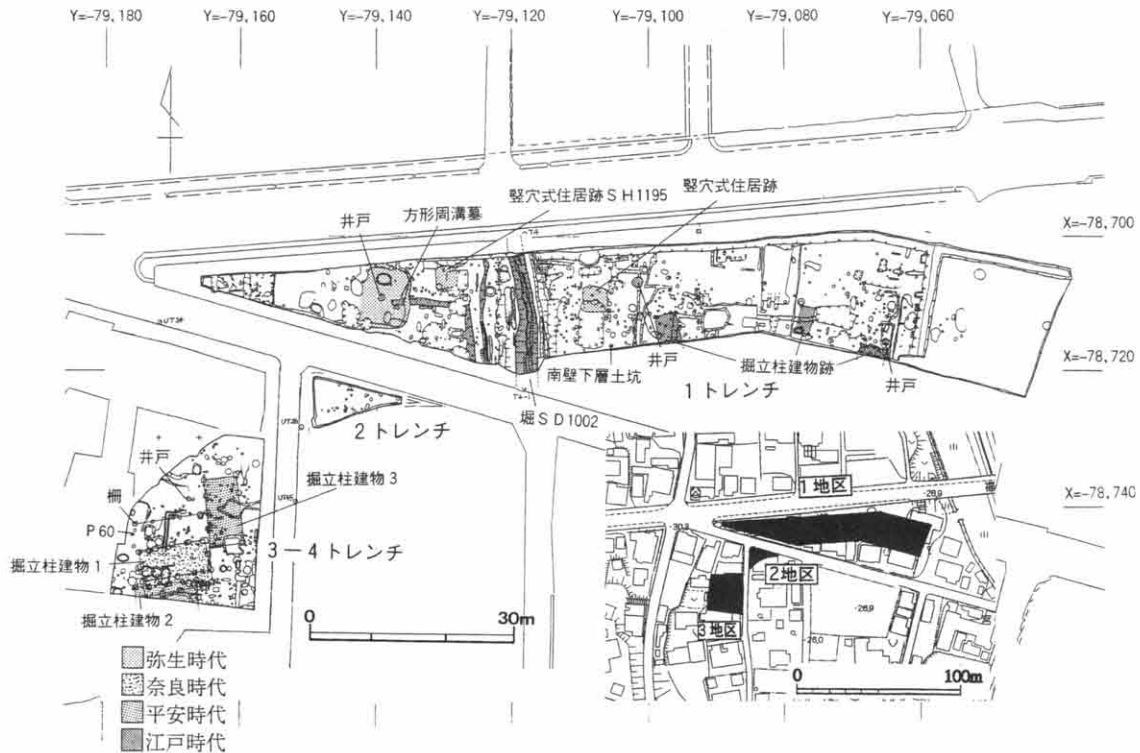
2地区 奈良・平安時代の遺構としては、直径約30cmの柱穴を数基検出した。



第1図 調査地位置図
 (国土地理院1/50,000福知山)



第2図 調査地区配置図



第3図 1～3地区検出遺構平面図

3地区 奈良・平安時代の遺構は、調査地の中央で東西4間、南北2間の南面に庇をもつ東西棟の掘立柱建物跡1棟と、その北側で建物跡に平行する柵を検出した。建物の身舎の柱間は約2.4m(8尺)を測る。調査地の南端では、東西4間、南北1間以上の東西棟の掘立柱建物跡1棟、北東部で南北4間、東西2間の南北棟の掘立柱建物跡1棟を検出した。身舎の柱間は約2.4m(8尺)を測る。江戸時代中期の遺構は、調査地の北西部で直径約1m、深さ3m以上を測る井戸1基を検出した。

まとめ

(1) 1地区で方形周溝墓と竪穴式住居跡を検出したことから、弥生時代後期には墓域として利用された時期と住居域に利用された時期があったと考えられる。

(2) 1・3地区で検出した奈良・平安時代の遺構は、今回の調査で初めてその存在が明らかになった。庇を付した立派な建物が存在することから有力者の居宅の可能性も考えられ、調査地の周辺部に同時代の遺構がさらに広がっているものと考えられる。

(3) 1地区で検出した江戸時代前期に埋まった堀や中期の井戸は、福知山城の絵図などには見られないものである

(戸原和人)

9. ^{そのべじょう}園部城跡第6次

所在地 船井郡園部町小桜97
 調査期間 平成16年10月13日～11月29日
 調査面積 約320m²

はじめに 今回の調査は、園部城跡において、京都府立園部高等学校運動場広場の建設に先だ
 って実施したものである。平成15年度から3か年にわたり調査が計画され、今回は2回目になる。
 昨年度調査地点の西側約320m²について調査を実施した。

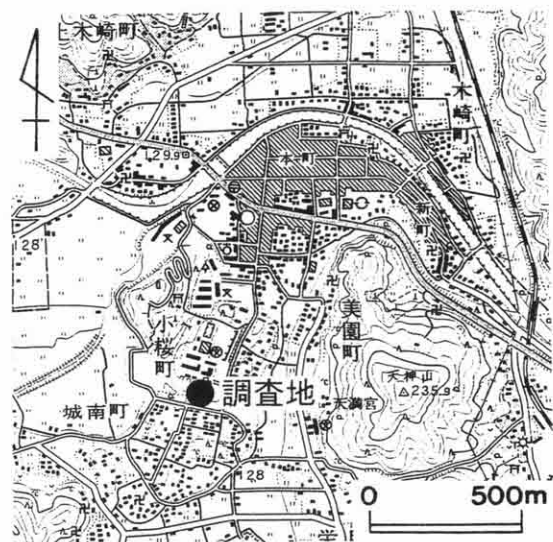
園部城跡は、標高約145m前後の小高い丘陵に立地し、本丸とその周辺は、現在、京都府立園
 部高等学校の敷地となっている。園部城跡は、城地交換により、但馬出石城主小出信濃守吉親の
 陣屋として、元和5(1619)年に造営が始まり、元和7(1621)年に開城した。以降、約250年間、
 園部藩主小出氏の居城となった。慶応4(1868)年から明治2年にかけて行われた大規模な城普請
 を最後に、明治4年の廃藩置県により廃城となり、城内の主な建造物は移築、解体された。

園部城跡では、これまでに幾度か調査が行われているが、本丸跡地で行われた昭和56・62年度
 の調査が主たるものである。これらの調査では、石組み遺構、水路状遺構、井戸などの園部城関
 連遺構が検出されたほか、古墳時代中期の方墳2基など築城以前の遺構も検出された。城の遺構
 は、現在、魯門・巽櫓・石塁の一部が残るのみであるが、これらの調査により、地下には遺構が
 良好な状態で遺存することが判明した。

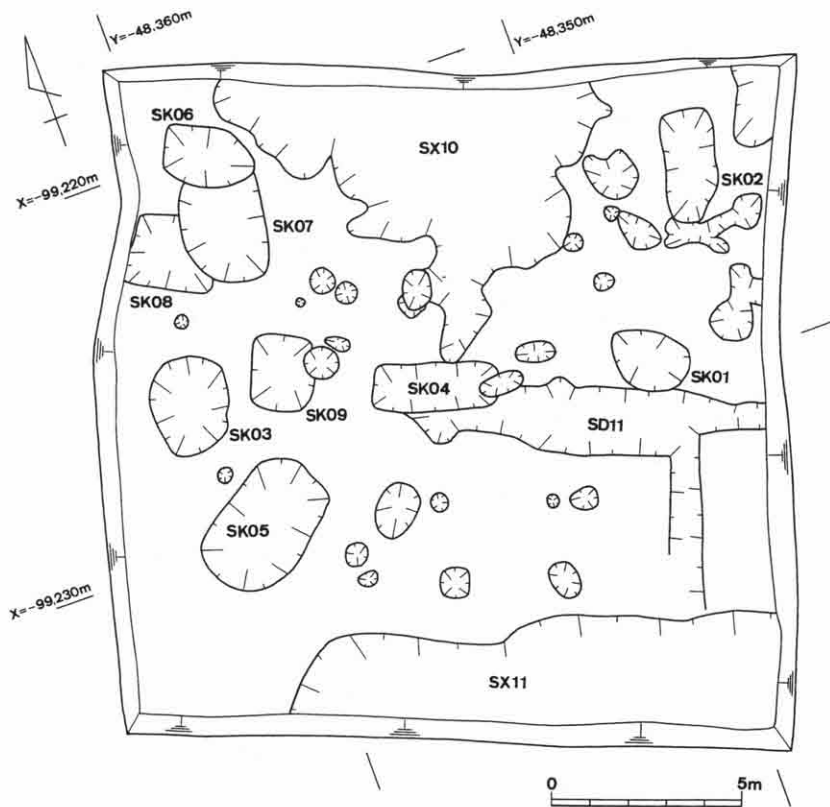
今回の調査地は、本丸の南側に位置する標高136m前後の郭状の平坦面であり、昨年度調査地
 の西側にあたる地点である。絵図に長屋跡、台所跡などが記される場所である。

調査概要 調査地区の縄張り後、重機を用いて表土を除去し、遺構検出面まで、人力による掘
 削作業を行った。この後、精査を繰り返して遺構
 を検出した。検出遺構はそれぞれについて、出土
 遺物に注意しながら掘削を進めた。各遺構の調査
 後に、遺構形成面の平坦面の成因を探るために断
 ち割りを行い土層断面の観察を行った。作業の進
 捗状況に応じて、写真撮影、図化などの記録作業
 を行った。掘削と記録終了後にラジコンヘリコプ
 ターを用いて空中写真撮影を実施した。

調査の結果、絵図に記された長屋や台所などの
 建物跡を見つけることはできなかったが、これに
 付属したと推測される土坑、柱穴などの遺構を多
 数検出することができた。土坑SK01～05からは、



第1図 調査地位置図(国土地理院1/25,000園部)



第2図 第6次調査検出遺構

18世紀後半期から19世紀代の伊万里・唐津・丹波・清水などの陶磁器類が多数出土した。陶磁器類は、椀や酒器、土瓶など、生活雑器が中心である。ガラス製簀や水滴、香炉なども出土している。土坑から出土した遺物はすべて破片であることから、土坑は塵捨て穴と考えられる。

SX10は、土坑群が形成された整地層の下位に位置し、これらの遺構に先行して形成された遺構と考えられる。広範囲に炭が分布し、瓦や陶磁器などが出土した。建物の改修などで生じた廃棄物を焼成処理した痕跡であろう。

昨年度の調査で、調査地点の平坦地形は、大がかりな土木作業の結果形成された盛土遺構であることが判明している。盛土は、本丸の周囲を巡る内堀から中堀へ向かって行われたのであるが、今回の調査でも中堀側に傾斜する盛土の痕跡を確認することができた。

まとめ 今回の調査では、江戸時代後期を中心とする生活遺物と遺構を確認した。

調査地は、安政年間に描かれた絵図によると、土屋敷(長屋)、下台所などが描かれているが、この調査では屋敷跡を示す遺構を検出することはできなかったものの、生活雑器類を多数検出し、絵図に対応する生活遺構が近隣に存在したことを裏付けることができた。また、安政期の絵図に描かれたこの場所が、江戸時代の大規模な造成工事により形成された郭であることを追認することができた。

(田代 弘)

10. ^{もろはた} 諸畑遺跡第3次

所在地 船井郡八木町諸畑
 調査期間 平成16年9月6日～11月29日
 調査面積 約600m²

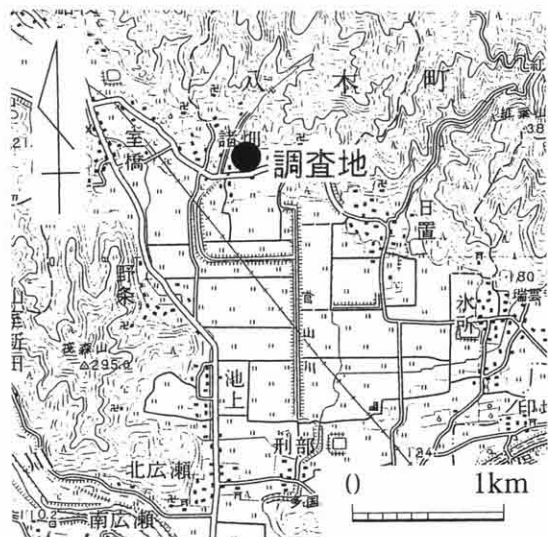
はじめに 諸畑遺跡第3次発掘調査は、府営経営体育成基盤整備事業川東地区に伴い、京都府南丹土地改良事務所の依頼を受けて実施したものである。本調査は、平成16年度に京都府教育委員会が実施した試掘調査(約240m²)の成果に基づき実施した。

調査概要 発掘調査地点は大きく3か所に分かれるため、西から順にA・B・C地区とした。

①A地区 基幹排水溝部分にトレンチを2か所に分割設定し、北からそれぞれA-1トレンチ、A-2トレンチとした。また、調査中に次年度調査のための試掘調査を追加依頼されたため、さらにA-3～5トレンチを設定した。A-1・2トレンチでは、いずれのトレンチでも官山川の旧流路の内部に当たり、遺物は出土しなかった。

②B地区 弥生時代中期の長方形土坑1基、弥生時代後期～古墳時代後期にかけての竪穴式住居跡4基、鎌倉時代に属する性格不明の六角形の土坑1基、そのほか、奈良時代の柱穴1基、平安時代の柱穴1基、鎌倉時代の土坑・柱穴などを多数検出した。

竪穴式住居跡SH03 トレンチ東寄りで検出した隅丸方形の竪穴式住居跡で、規模は北東-南西の一辺6.2m、北西-南東の一辺5.5m、検出面からの深さ17cmを測る。住居の周壁に沿って周壁溝が見られた。主柱穴は4基の内の3基を検出し、残る1基は調査区外に存在すると考えられる。竪穴式住居跡SH03は検出当初から多量の炭化物で覆われており、一見して「焼失住居」であることは明らかであった。埋土を掘削していく過程で炭化材が放射状に分布する状況を検出し、焼土・赤色変化が少量ずつ点在する状況も検出した。焼失住居の埋土に特有の炭灰層は、住居床面直上についており、中央土坑内や主柱穴内にも堆積していることが判明した。主柱穴内の炭灰層は柱穴の底部付近まで到達しており、焼失時に柱穴内に主柱が存在していなかった可能性が高い。また、周壁溝内部にも堆積しており、西側周壁溝底部で炭化材を確認した。出土遺物は、弥生土器と粘土塊である。これにより、弥生時代後期末の竪穴式住居跡であることが分かる。しかし不意の失火や戦乱による焼き討ちとされる種類の焼失住居に特有の完形土器群は検出されず、ほとんどの土



調査地位置図(国土地理院1/50,000京都西北部)

器が完形に復原できない破片である。粘土塊は住居の西部周壁溝内で1点と東側床面上で1点を検出した。以上の所見から竪穴式住居跡S H03は、竪穴式住居の廃絶時に主柱を抜き取り、中央土坑の蓋を取り去り、周壁溝に立てられた壁板を取り外して使用可能な土器を持ち去った後、なぜか土器素材の粘土塊のみ置き去りにして焼却処分した住居跡であると判断される。

近隣の遺跡で検出された焼失住居には、八木町野条遺跡第5次調査竪穴式住居跡S H0401、同第7次調査竪穴式住居跡S H0301がある。いずれも弥生時代後期後葉の方形竪穴式住居跡である。第7次竪穴式住居跡S H0301は、主柱の抜き取りが見られず、完形土器群が存在することから不意の失火または戦乱による焼き討ちが考えられるが、第5次竪穴式住居跡S H0401は、完形土器群は見られるものの、主柱穴内から炭化物が出土しており、これが炭灰層であるならば主柱の抜き取りがあったことになる。そこで土器の組成を見ると完形に復原できるものの中に甕が見あたらないことが特徴として挙げられる。また、出土状況の写真では、完形品が土圧で押し潰された状況で出土しているものは壺類のみである。第7次調査の甕がほとんど完形で出土しているのとは対照的である。通常竪穴式住居内での生活で煮炊具は必要不可欠であり、第5次竪穴式住居跡S H0401ではそれを欠いているということはある程度の土器の持ち出しを行っている可能性が高い。第7次竪穴式住居跡S H0301で出土している石鏃・鉄鏃も第5次竪穴式住居跡S H0401では欠いていることなども貴重品を持ち出している可能性を示唆する。従って第5次竪穴式住居跡S H0401も、諸畑遺跡竪穴式住居跡S H03のように廃絶に伴う焼却処分である可能性が高い。

③C地区 弥生後期末半～古墳時代前半の竪穴式住居跡5基、土坑、柱穴などを検出した。

竪穴式住居跡S H05 京都府教育委員会が試掘調査で検出した六角形もしくは八角形の竪穴式住居跡である。一辺の長さは2m、住居跡の規模は東西およそ4mほどと推測される。検出面からの深さは15cmを測る。床面の南側は一段高くなっており、南辺が出入り口である可能性が高い。北側の低い床面には厚さ5cmの貼床が施されており、周壁溝はこの貼床面から掘り込まれている。周壁溝の幅は12cm、深さは5cmを測る。貼床と遺構の基盤土が同色・同質であったため、主柱穴を検出することはできなかった。弥生後期末頃の竪穴式住居跡である。

多角形住居は弥生時代中期後半、円形住居から方形住居へと住居平面形が大きく転換する時期に出現する。近畿地方では大型の住居に多く見られるが、分布の中心であり、検出例のおよそ3/4を占める鳥取県では20～30㎡の普通規模のものが多い。円形住居は短い梁を中継する主柱を多くすることで床面積の拡大を図る。方形住居は長い梁を4基の方形に配した主柱で中継し、床面積の拡大を図る。多角形住居はその中間的な存在であり、短い梁を多数の主柱で中継し、住居の周壁は直線状にするものである。京都府内での多角形住居の検出例は少ないが、亀岡市宮川遺跡では竪穴式住居跡S H05とほぼ同規模の八角形の竪穴式住居跡が検出されている。こちらは弥生時代後期前葉の住居跡である。

まとめ 今回の発掘調査によって野条遺跡に後続する八木町北部の弥生時代末期から古墳時代の集落遺跡の実体を垣間見ることができた。次年度の調査によりさらに様相が明らかになることが期待される。

(福島孝行)

11. ^{ときづか}時塚遺跡第8次

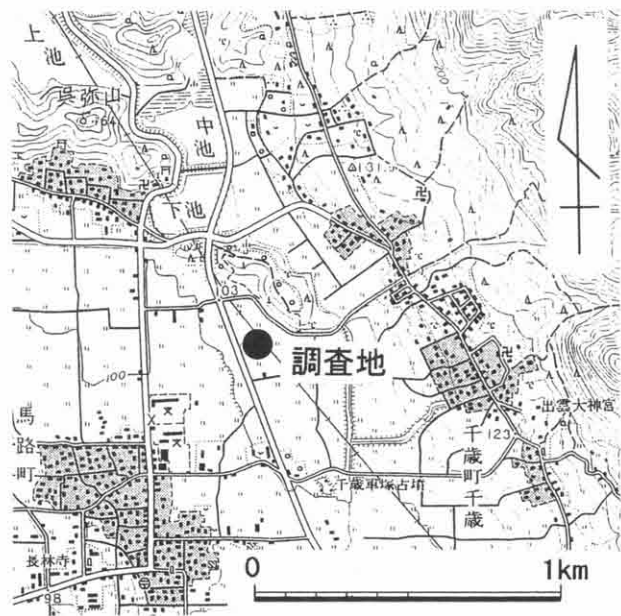
所在地 亀岡市馬路町字時塚・千歳町千歳

調査期間 平成16年8月2日～11月18日

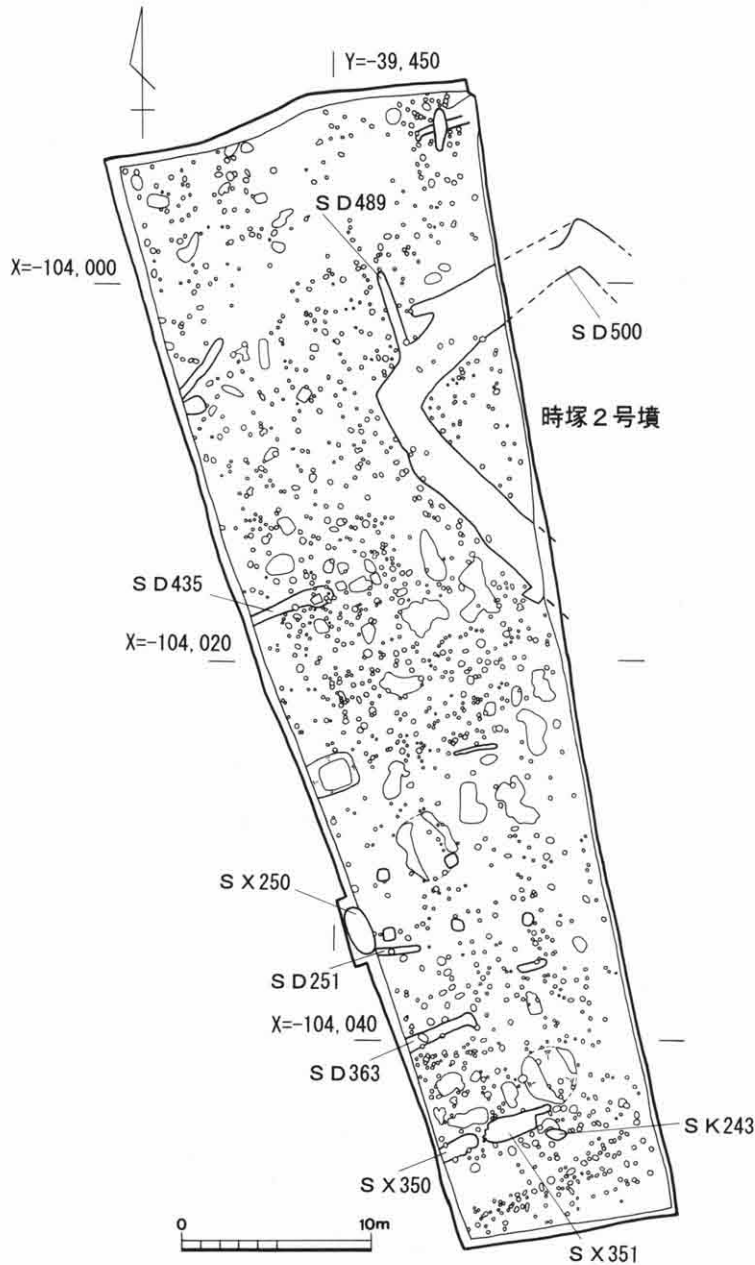
調査面積 1,200m²

はじめに 調査は、国営農地再編整備事業「亀岡地区」に伴い、農林水産省近畿農政局の依頼を受けて実施した。時塚遺跡は、馬路町と千歳町の町境に広がる遺跡で、その範囲は東西約800m、南北約600mを測る縄文時代から中世にかけての遺跡である。今年度調査の第6次調査では、弥生時代中期の竪穴式住居跡や方形周溝墓、古墳時代中期後半の造出をもつ方墳とそれに伴う盾持ち人形埴輪などの形象埴輪、さらに平安時代初期の井戸や掘立柱建物跡などが確認されている。今回の調査は遺跡の北東部にあたる(第1図)。

調査概要 今回の調査では、道路沿いの調査区であるDトレンチと、さらに東側にあるE・Fトレンチの3地区で発掘調査を実施した。Dトレンチでは、古墳の周溝をはじめ、弥生時代の土坑や土坑墓・溝・柱穴などを検出した(第2図)。古墳の周溝である溝S D500の幅は、最大で約2.5m、深さは最深で約0.4mを測る。溝内からは壺・甕・杯蓋などの5世紀末～6世紀初めに属する須恵器が出土した。出土遺物の時期から、古墳時代中期末に造られた古墳であると考えられる。トレンチの南側で検出した土坑墓S X351は、長辺約2.5m、短辺約1.2mを測り、長方形を呈する。土坑内でH型の木棺痕跡を確認し、埋土からは弥生時代中期後半の土器が出土した。土坑S K243は、長辺約1.1m、短辺約0.7m、深さ約0.3mを測る楕円形を呈する土坑で、弥生時代中期後半の土器や磨製石斧が出土した。また、土坑S K250は長辺約1.4m、短辺約0.9m、深さ約0.15mを測る楕円形を呈する土坑で、弥生時代中期後半の土器が多量に出土した。Eトレンチは、調査区内に3か所にトレンチを設定し調査を実施した。遺構面までは、現地表から最深で約1mを測り、その上層で灰色土の遺物包含層が堆積していた。包含層からは、弥生土器のほかに須恵器・緑釉陶器・瓦器などが出土した。検出遺構は、直径15cm前後の柱穴や土坑・溝である。Fトレンチでは、4か所のトレンチを設定した。遺構面までは最深で約1.2mを測り、上層にはEトレンチと同じく遺物包含層が堆積する。検出遺構は、円形の土坑・溝・柱



第1図 調査地位置図(国土地理院1/25,000亀岡)



第2図 Dトレンチ検出遺構平面図

年度の第6次調査で、古墳時代中期後半に造られた古墳(時塚古墳)が検出されていることから、亀岡市教育委員会と協議し時塚2号墳と呼称することにした。また、第6次調査で検出した1号墳の周溝と比べると小型ではあるが、ほぼ同一の方位をもって造られていることもわかった。時塚2号墳の造られた時期を古墳時代中期末(5世紀末～6世紀初め)と考え、盾持ち人形埴輪が出土した1号墳(古墳時代中期後半)より新しく、1号墳の築造直後に造られた古墳であると考えられることができる。周辺に所在する千歳車塚古墳などの古墳との関係や、当時の集落の位置などについて、今後検討していく必要がある。

(村田和弘)

穴などである。また、E・Fトレンチで検出した遺構面は、西側から東側に向かって傾斜し、検出した遺構も希薄なことから遺跡の東端部の可能性が高い。

まとめ 今回の調査では、弥生時代と古墳時代の遺構を検出した。Dトレンチでは、弥生時代中期の土坑・土壙墓・溝・柱穴などを検出した。弥生時代の遺物はいずれも中期の土器や石器である。今回の調査区から方形周溝墓が検出されなかったことから、第6次調査のA地区と同様に墓域ではなく居住域であった可能性が高いと思われる。また、古墳時代の遺構では、古墳の周溝である一辺約12mを測る直角に曲がる溝S D 500を確認した。墳丘は削平を受け残っていないが、出土遺物から古墳時代中期末(5世紀末～6世紀初め)と考えられる。今年

12. 池尻^{いけじり}遺跡 第5次

所在地 亀岡市馬路町池尻滝ヶ元

調査期間 平成16年9月6日～11月5日

調査面積 約600m²

はじめに 今回の調査は国営農地整備再編事業「亀岡地区」に伴い農林水産省近畿農政局の依頼を受けて実施した試掘調査である。

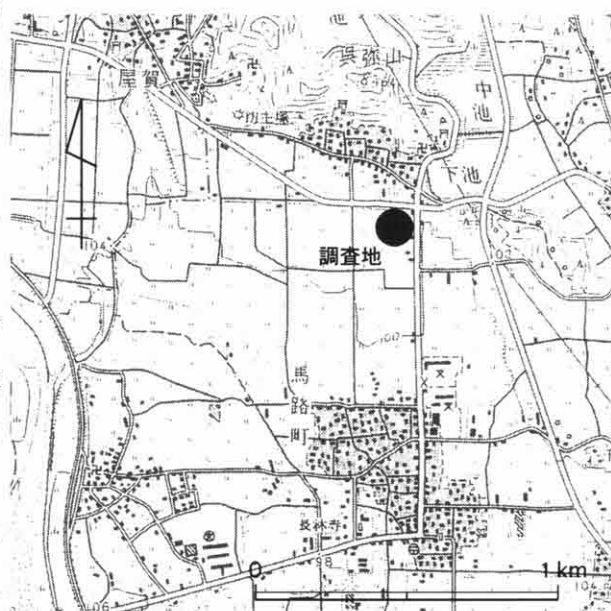
池尻遺跡は、桂川の東岸、呉弥山南裾に広がる低位段丘上に位置している。遺跡の調査はこれまで、亀岡市教育委員会の調査分を含め、4次にわたり実施され、1992・1993年に当調査研究センターで実施した府道新設に伴う第1・2次調査では、重要な成果があがっている。この調査では、遺跡東端で、弥生時代前期の土坑・溝などが検出され、弥生時代前期の墓域である可能性が考えられた。また、遺跡中央から西端にかけては、奈良時代の遺構・遺物が検出され、特に第1次調査の第3調査区では、漆の運搬用に使用されたと考えられる長頸壺、パレットとして利用されたとみられる杯身など多数の漆関連遺物が出土した。また、第2次調査では、礎石建物や多数の瓦が確認され、「池尻廃寺」として古代寺院の存在が想定されている。池尻廃寺周辺では、寺域の確定のための調査が実施されており、奈良時代中葉～後半にかけて営まれたものと考えられている。

今回の調査地は、遺跡東端の第1次調査で弥生時代前期の遺構が検出された第1・2調査区に近接しており、当該期の遺構・遺物が検出されるものと予想された。

調査概要 調査に際しては、現地の耕作の都合上、大きくA～Cの3地区に対象地を分割し、各耕作地にトレンチを設定し、遺構・遺物の有無および現地表から遺構面までの深さを確認する調査を実施した。調査の性格上、遺構掘削は行っていない。

各トレンチの調査では、大部分のトレンチから遺構・遺物を確認することができた。遺構は小規模なピット・土坑・溝などが主体である。調査面積が狭小な上、遺構掘削を実施していないため性格については不明である。

出土遺物の総量は少ないものの、時期は縄文時代晩期と想定されるチャート剥片、弥生時代前～中期の土器・石器、古墳時代



第1図 調査地位置図(国土地理院1/25,000亀岡)

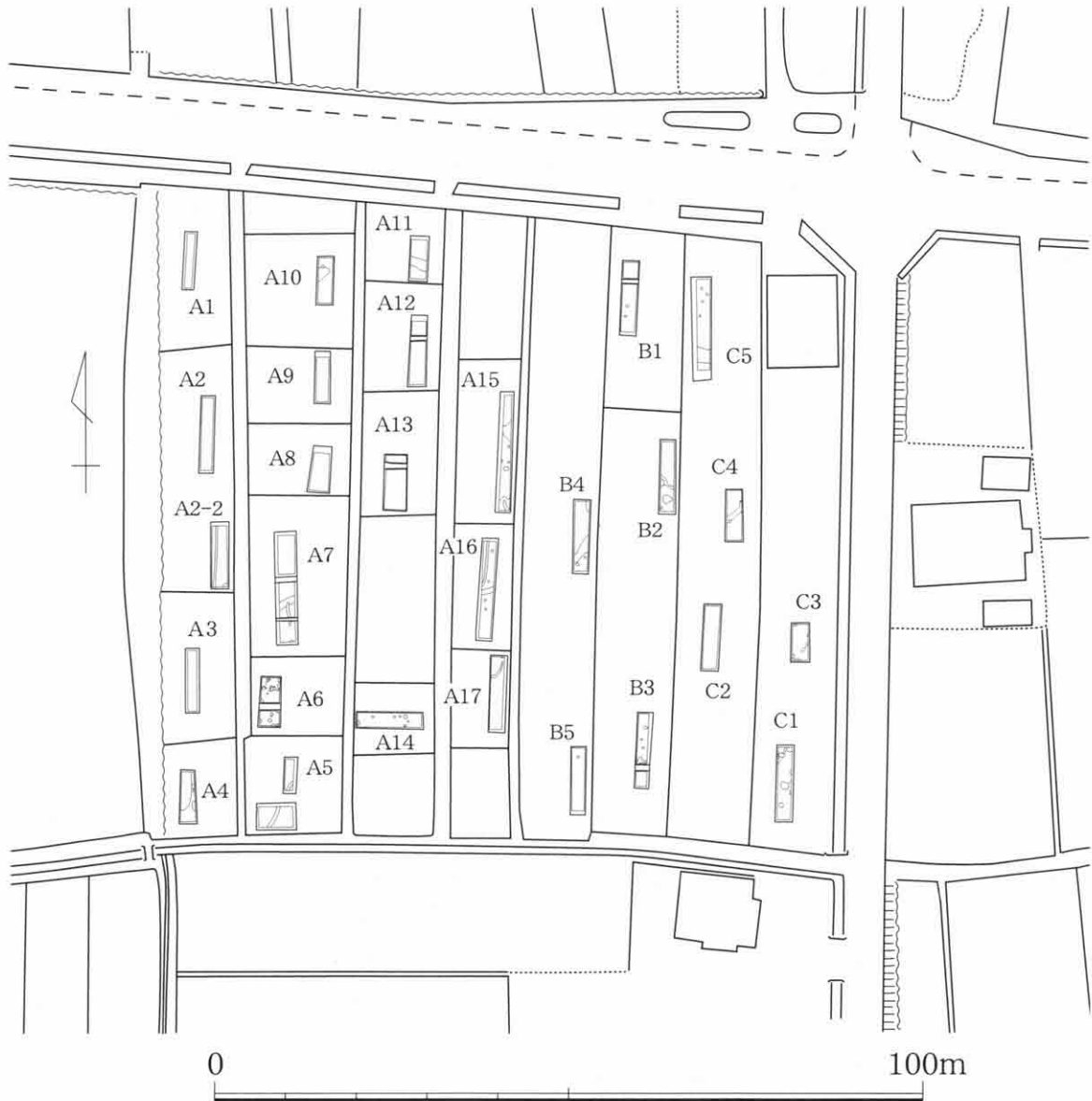
前期の布留式甕口縁破片、古墳時代後期に属する須恵器、平安時代の須恵器・緑釉陶器、鎌倉時代の瓦器片など各時期のものがみられる。

まとめ 今回の調査により以下の諸点が明かとなった。

- ① 弥生時代前期を中心とした遺構・遺物の広がりを確認することができた。
- ② 縄文時代晩期から中世の複数時期にわたる複合遺跡である。

なお、今回の調査結果から、ほ場整備の掘削深度に達せず、遺構面が保護されることが明かとなったため、試掘調査段階で調査を終了した。

(石崎善久)



第2図 調査トレンチ配置図

13. 案察使遺跡第6次

所在地 亀岡市保津町出井ほか
 調査期間 平成16年7月20日～12月3日
 調査面積 約1,000m²

はじめに 今回の調査は、京都府土木建築部の依頼により平成16年度主要地方道路亀岡園部線緊急地方道路整備事業に先立つ発掘調査として実施した。

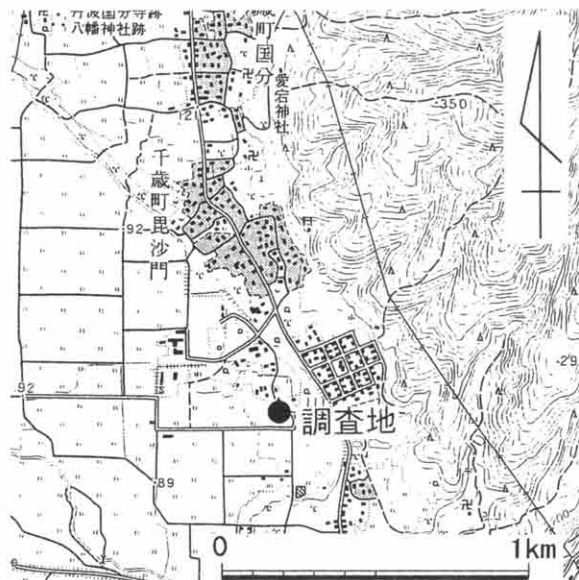
案察使遺跡は、亀岡盆地を貫いて流れる桂川の東岸に立地する集落遺跡である。平成14年度の調査では、2,140m²の調査を行い多くの土坑が検出された。その内部からは、弥生時代末の土器が出土している。道路造成に先立ち平成15年度に試掘調査を行い、本年度は遺構・遺物の期待できる3か所にトレンチを設定した。

調査概要 調査対象地は丘陵の縁に沿って湾曲しており、段丘崖と考えられる比高差が認められる。昨年度の試掘調査を基に、段丘崖の下の部分に2か所、上に1か所の調査トレンチを設けた。南端から第1～3トレンチと名付けた。

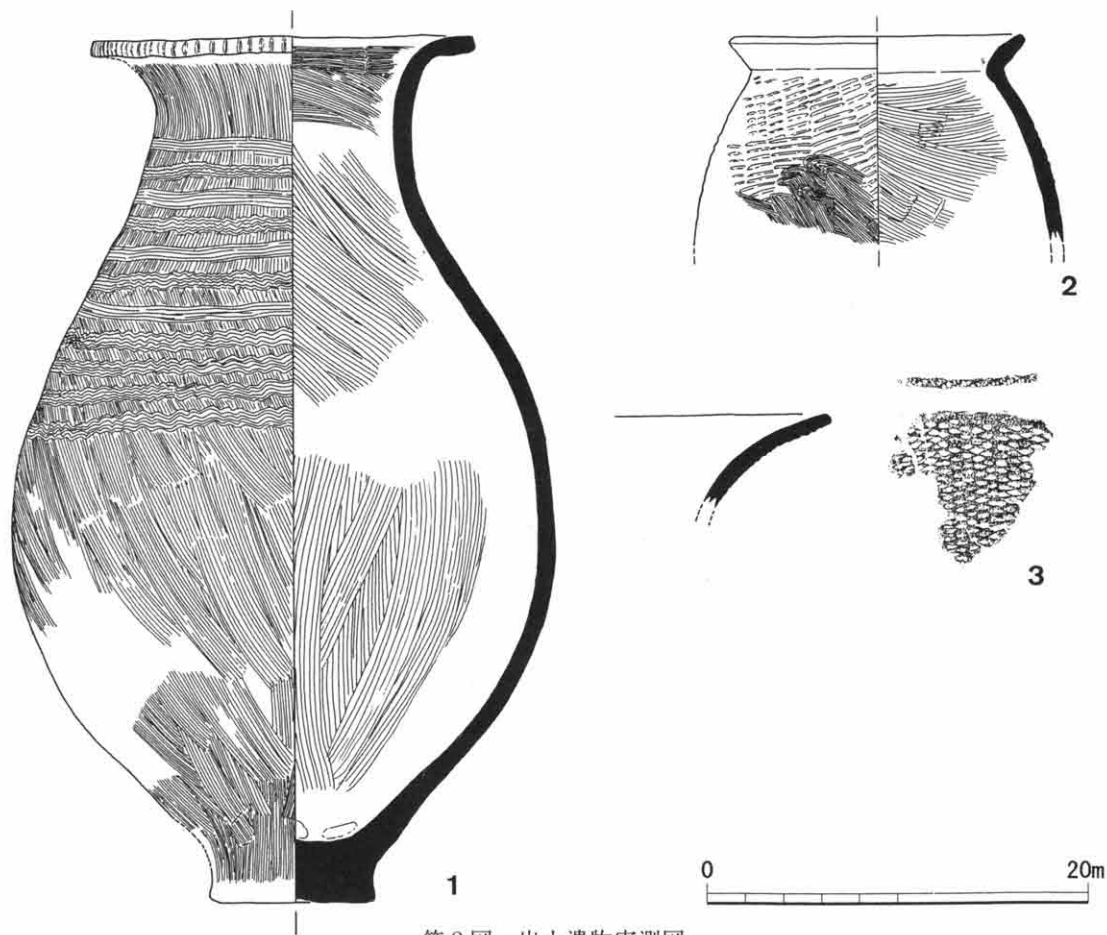
第1トレンチは、平成15年度の調査では、弥生時代末の土坑から土器と木器が出土している。今年度の調査では10か所あまりの土坑が検出され、昨年度同様、弥生時代末の庄内式土器(第2図2)や木製品が出土している。また、調査トレンチで最も北にある土坑S K 01からは弥生時代中期の土器も出土している。これらの土坑は、遺跡の地表下に広がる黒色の粘質土を土器の材料として採取した跡と考えられる。

第2トレンチは、平成15年度調査では、土坑S K 14内から弥生時代中期前葉の壺(第2図1)が完形で出土した。その土器の中からは石庖丁が出土している。

今年度調査では、地形の変換点を発見し、その斜面には弥生～平安時代に至る遺物を含む層が残っていた。包含層を取り除くと、土坑や柱穴数基が検出できた。また、包含層の被覆しない地域であるが、トレンチ中央部で溝が検出された。この溝からは、弥生時代中期の土器が出土している。建物としてはまともでないが平安時代末の柱穴も確認できた。昨年度の調査区を中心に、無遺物層まで削平が及んでいるが、今回の調査によって削平を免れている場所では、長期間にわたりこの場所に遺跡が存在していたことがわかった。



第1図 調査地位置図(国土地理院1/25,000亀岡)



第2図 出土遺物実測図

第3トレンチは、段丘の下に設けたトレンチである。昨年度の試掘調査では、耕作層を除去し安定面と考えられる地層上面での遺構検出を試みたが、遺構を検出することはできなかった。下層の遺物確認のため部分的に深掘りを行った結果、広域火山灰であるアカホヤ火山灰層を検出した。アカホヤ火山灰と考えられる層の下には黒色の粘質土があり、有機物とともに縄文時代早期の土器片(第2図3)が出土した。今年度の調査では、機械掘削によって火山灰直上まで下げ、人力によって包含層を掘削し縄文土器の検出に務めた。その結果、昨年度の深掘り地区に隣接した場所から縄文土器が出土した。この縄文土器は縄文時代早期の押型紋土器で、その特徴から、大川式土器と考えられる。

まとめ 調査対象地内では、縄文時代早期・弥生時代中期・弥生時代末の3時期の遺構・遺物が確認されていたが、今回、第2トレンチで平安時代の遺構・遺物が新たに検出された。

第3トレンチで発見された縄文時代早期の土器は、ネガティブタイプの押型紋土器で発掘調査によって出土した縄文土器では、京都府内で最も古い土器として位置づけられる。出土層の検討から、生活面ではなく沼状の水面下の堆積物中で発見されていることが明らかになった。出土地点や個体数が限られ、石器や土器以外の遺物は発見されていない。

(中川和哉)

14. ^{ながおきょう}長岡京跡右京第829次・^{ともおか}友岡遺跡

所在地 長岡京市友岡西山16-1ほか
 調査期間 平成16年7月26日～平成17年1月21日
 調査面積 約900m²

はじめに この調査は、府道石見下海印寺線広域幹線アクセス街路整備事業に伴い、京都府土木建築部の依頼を受けて実施したものである。調査地(7ANNM-5地区)は、小泉川左岸の低位段丘上に位置し、長岡京跡の条坊復原推定によれば右京七条三坊十町(新条坊呼称では、右京七条三坊十二町)にあたる。また、調査地は縄文時代～近世にかけての集落跡である友岡遺跡と重複する。周辺には、東約1kmに国史跡の大型前方後円墳である恵解山古墳(古墳時代中期)、南東に近接して靱岡廃寺(飛鳥～平安時代)、西には伊賀寺遺跡(旧石器時代～近世)がある。

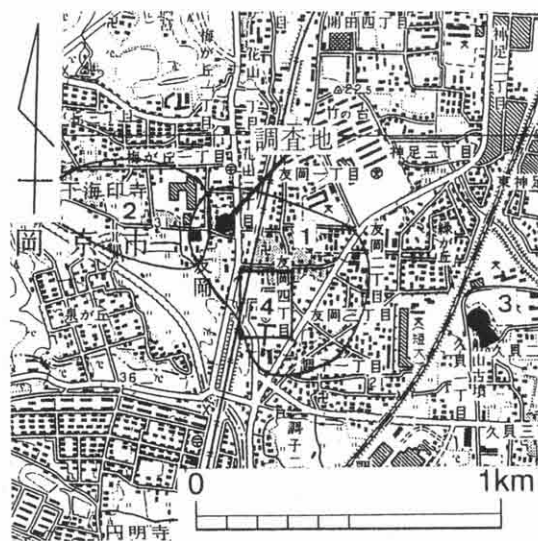
調査概要 調査地は府道の西側に面し、道路・水路の関係から3か所に分かれ、北から順にA～Cの地区名を設定した。

A地区 多数の柱穴と共に、掘立柱建物跡2棟(SB14・19)・土坑SK56・溝SD2を検出した。掘立柱建物跡SB14は東西棟建物とみられるが、調査地外にのびることから全体像は不明である。検出遺構は、いずれも平安時代末から鎌倉時代の遺構である。

B地区 溝SD90(飛鳥時代)、柵SA89(平安時代後期)、井戸SE111(鎌倉時代)を検出した。SA89は掘立柱建物跡の可能性もあり、詳細は不明である。SE111は石組み井戸であり、瓦器碗、瓦質三足付の羽釜、土師皿など残りの良い遺物の出土をみた。

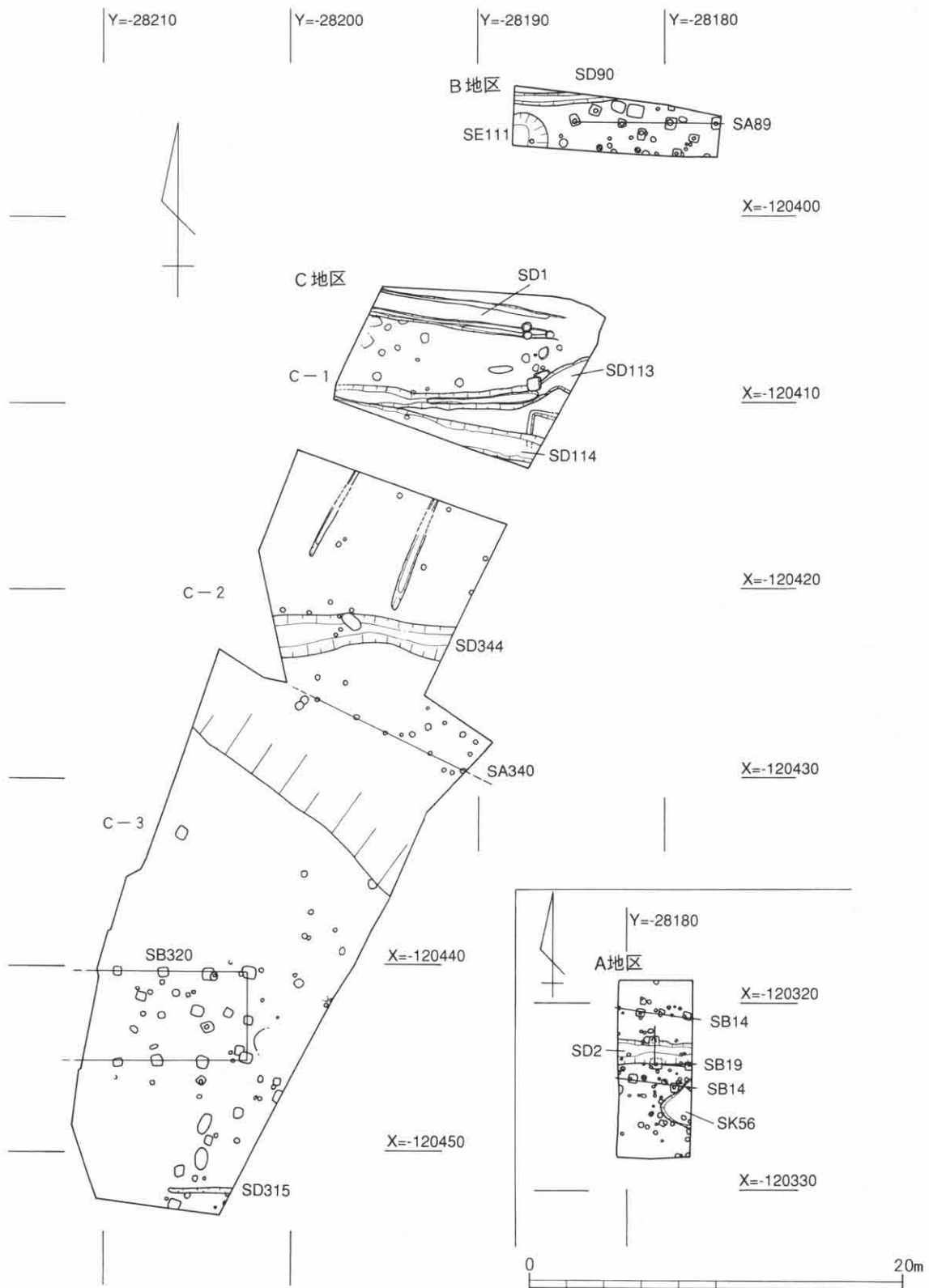
C地区 調査地北半部は、B地区を含め遺構面が1m程度低い高低差を測り、東西方向の浅い谷地形を呈する。この谷部では、溝SD1(鎌倉時代)・溝SD113(飛鳥時代)など、東西溝群を検出した。南半部の段丘上では東西棟の掘立柱建物跡SB320(鎌倉時代)、溝SD315(長岡京期)を検出した。また、調査地中央の谷傾斜地では、柵SA340(鎌倉時代)を検出した。

まとめ 今回の調査では、主目的であった長岡京期の遺構検出は、C地区南端で検出した東西溝SD315が唯一の遺構であった。過去、当地の西で実施された右京第70次調査検出の東西溝7005は、七条坊間小路北側溝の可能性が示されている。今回検出の溝SD315は、先の溝SD7005の北側



第1図 調査地および周辺主要遺跡位置図
 (国土地理院1/25,000京都西南部・淀)

1. 友岡遺跡
2. 伊賀寺遺跡
3. 恵解山古墳
4. 靱岡廃寺



第2図 遺構平面図

36m(120尺)に位置する。溝SD315は幅0.4mと規模も小さいことから、条坊宅地内に設けられた区画溝と判断される。検出遺構の多くは、平安時代末～鎌倉時代に属する。当地では長岡京期には薄かった人々の生活が、古代末～中世にピークを迎える状況が明らかとなった。(竹原一彦)

15. ^{ながおかしょう}長岡京跡右京第830次・^{かみざと}上里遺跡・^{いのうち}井ノ内遺跡

所在地 長岡京市井ノ内頭本・廣海道
 調査期間 平成16年7月26日～平成17年3月9日
 調査面積 約2,500m²

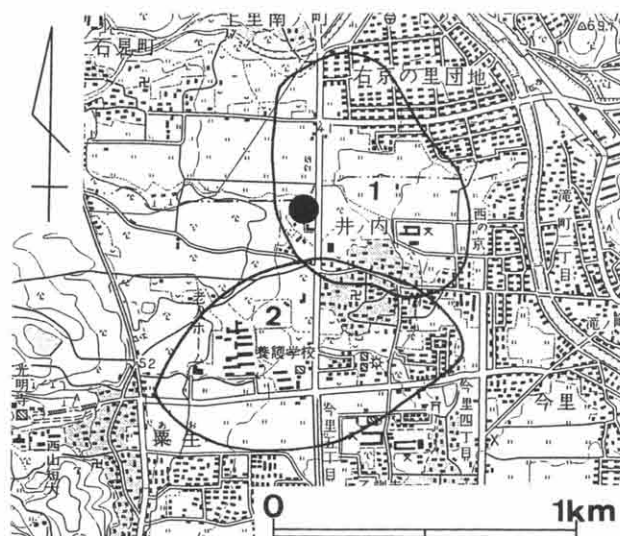
はじめに この調査は、主要地方道大山崎大枝線緊急地方道整備事業に伴い、京都府土木建築部の依頼を受け実施したものである。調査地は、小畑川右岸の善峰川により形成された沖積地南側の低位段丘上に位置する。京都市境から南側約340mのうち、調査可能な範囲の中で、北端から南に向かってA～Eの5か所のトレンチを設定し調査を実施した。この範囲は、長岡京の条坊復原推定によると、右京二条四坊一町から右京二条四坊一町(新条坊：右京二条四坊三町から右京二条四坊三町)にあたり、西三坊大路の路面上が調査地となる。平成15年度に調査地の北側で(財)京都市埋蔵文化財研究所が行った調査(右京第772・775次)では、縄文時代晩期の甕棺墓、古墳時代の竪穴式住居跡・掘立柱建物跡、長岡京の西三坊大路西側溝・門跡や一条大路南側溝が検出されている。

調査概要 検出された遺構には、Aトレンチ(約1,000m²)では、縄文時代の土坑2基、古墳時代の竪穴式住居跡1基、平安時代の井戸が、Bトレンチ(約159m²)では、平安時代の井戸がある。Cトレンチ(約82m²)は削平が著しく、遺構は残存していない。

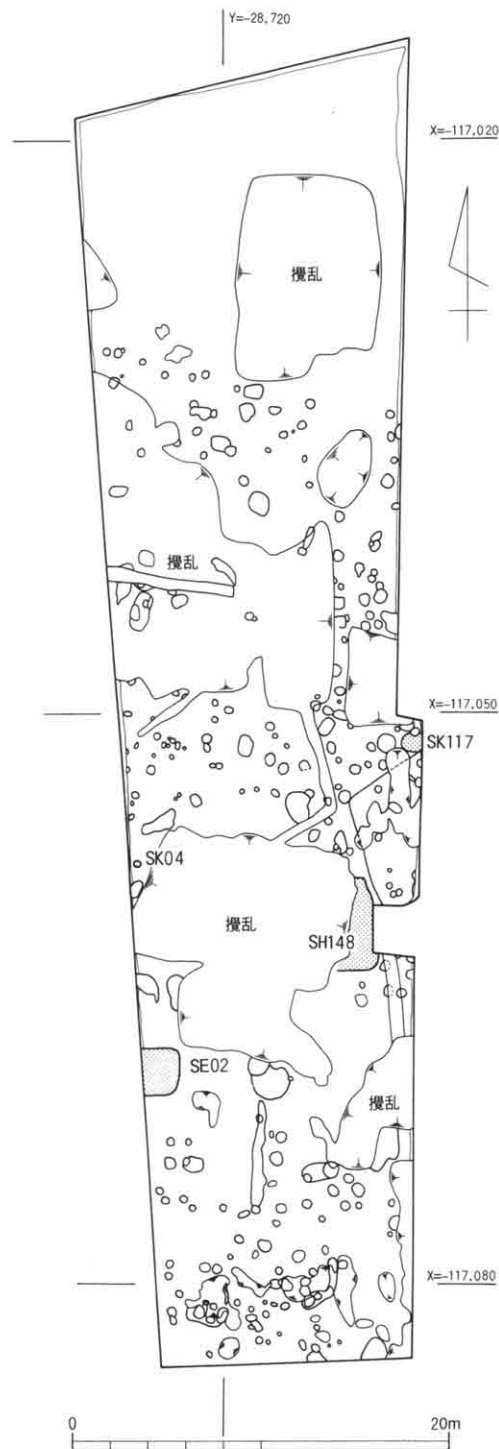
Aトレンチ中央西壁付近から土坑S K04、東壁付近から土坑S K117を検出した。土坑S K04は直径約0.35m、深さ約0.11mを測る円形土坑で、内部に破片を重ねたような状態で、縄文土器深鉢が埋納されていた。壊れたものを埋めたようで、鉢の体部中位から底部にかけては残存せず、口縁部も揃わない部分が認められる。土坑S K117は直径約0.6mの楕円形土坑で、深さ0.35mを測る。土坑中位付近に深鉢底部付近のみ、立位で埋納していた。これらの遺物は、縄文時代中期後半の時期が考えられる。

Aトレンチで検出した竪穴式住居跡S H148は、攪乱により大半が削平を受けているが、一辺4.5mほどの規模が復原される。内部から遺物は出土しなかったが、周辺から出土する遺物などから、6世紀末頃と推定される。

Aトレンチのやや南寄りの西壁付近で井戸S E02を検出した。検出面での規模は一辺2.6m、深さ2.4mを測る。中央部で直径



第1図 調査地位置図(国土地理院1/25,000京都市南部)
 1. 上里遺跡 2. 井ノ内遺跡



第2図 Aトレンチ遺構平面図

も検出されているが、井ノ内車塚古墳・稲荷塚古墳群・井ノ内古墳群などの古墳築造後の集落の様子を窺うことができる貴重な資料となる。

また、縄文時代中期の土坑が検出され、上里遺跡の上限が遡ることになり、周辺に拠点となる集落が存在するものと考えられる。

0.65m程の井戸枠が存在していた痕跡を確認した。埋土中からは、縄文土器・須恵器・土師器・瓦・陶磁器が出土しているが、平安時代前期の遺物が最も新しいものである。特筆される遺物として文字瓦『□万呂』の出土がある。長岡京内では初めての出土であり、類例としては恭仁宮跡の文字瓦に出土例がある。平城京の長屋王邸跡でも出土しており、瓦の再利用を考える上で重要な資料である。

Bトレンチでは、中央部分から、掘形の直径約5.6m、井筒の直径3m、検出面からの深さ約2.9mで方形に据えられた井戸枠を確認した。井戸枠は、一辺約0.8mを測り、内側に縦板を各辺に2～3枚ずつ据えている。検出面から約3.5mまで掘削を行った。内部の埋土中からは、平安時代前期を中心とする遺物が多数出土した。特筆される遺物として黒色土器風字硯や磚、製塩土器がある。最も新しい遺物は10世紀中頃と考えられ、この時期に完全に埋没したものと考えられる。

まとめ 今回の調査では、長岡京期の遺物は出土したが、遺構を確認することはできなかった。また、検出された多くの柱穴は、大半が平安時代～中世にかけてのものと考えられるが、建物跡を特定するにはいたらなかった。

期待された西三坊大路西側溝の南延長部は検出されなかった。台地の縁辺部に位置することから後世に削平されたか、推定延長部分に現代の攪乱が多く認められることからみて、これに伴い消滅した可能性などが考えられる。

古墳時代後期の竪穴式住居跡は、周辺の段丘上でも

(増田孝彦)

16. ^{たきぎ}薪遺跡第6次

所在地 京田辺市新巽2番地
 調査期間 平成16年9月21日～12月27日
 調査面積 約750m²

はじめに 今回の調査は、主要地方道八幡木津線道路整備促進業務に伴い京都府土木建築部の依頼を受けて実施した。

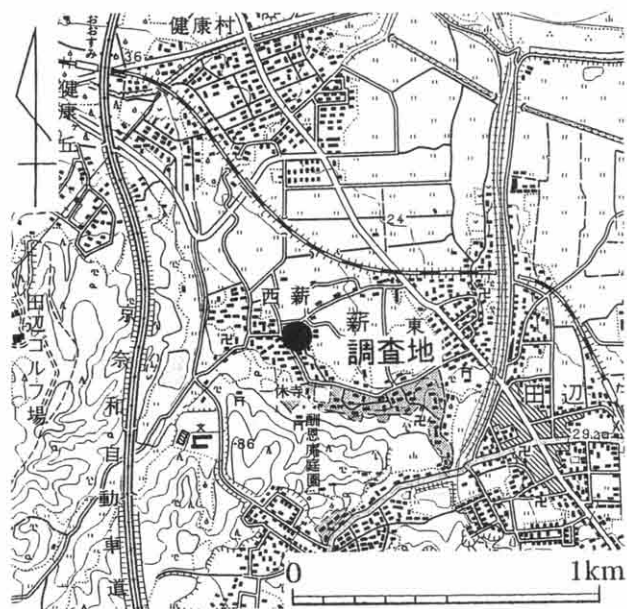
薪遺跡は南山城の中央部、木津川左岸丘陵裾部に位置し、木津川支流である甘南備山を源流とする手原川の扇状地上に立地している。周辺の遺跡では堀切古墳群や堀切横穴群の調査が行なわれ、石棺や武人埴輪などの貴重な遺物が出土している。また、北西丘陵上の郷土塚2号墳では鳥形埴輪・家形埴輪などの出土が見られ、周辺の古墳は形象埴輪の豊富な地域と言える。

薪遺跡の範囲はおよそ500m四方に及び、過去の調査結果から古墳時代と平安～鎌倉時代を中心とする集落遺跡と考えられていた。平成13年度から始まった本事業に伴う試掘調査(調査面積:13年度約400m²、14年度約730m²、15年度約350m²)では、15か所の試掘トレンチを設定して調査を進めたところ、縄文時代の遺構や古墳の周溝が新たに検出され、薪遺跡が縄文時代にまで遡ることが明らかになった。

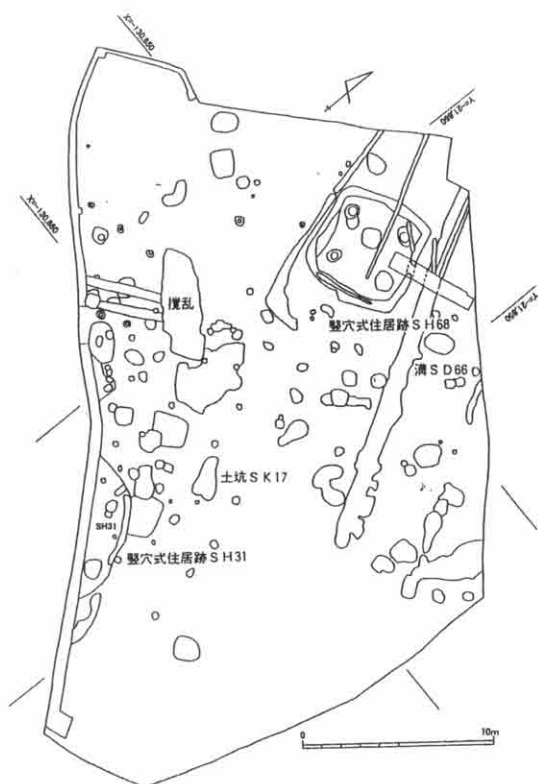
調査概要 平成13年度の試掘調査で縄文時代の遺構を検出した第4トレンチ部分を中心に調査区を設定し、発掘調査を実施した結果、縄文時代の竪穴式住居跡や多数の土坑、平安時代と思われる溝などを検出した。

竪穴式住居跡 S H 31 直径約10mを測ると考えられる円形の住居跡状の遺構で、調査地内で全体の約1/3を検出した。深さは検出面から約0.3mを測る。床面は平坦になっており、住居に伴うと思われる明確な支柱穴や周壁溝は確認できなかったが、竪穴式住居跡と考えられる。埋土中から若干の縄文土器の破片、焼土に伴い骨片が出土した。

竪穴式住居跡 S H 68 調査地北東部で検出した。一辺約5mを測る隅丸方形住居である。壁は削平されており、周壁溝と支柱穴4つを検出した。周壁溝は西側と南側では二重にめぐり、住居の部分拡張が考えられる。床面の中央やや北寄りには炉跡が見られる。炉跡は周囲に人頭大の角礫を配し、



第1図 調査地位置図(国土地理院1/25,000田辺)



第2図 遺構平面図

炉の内側には子どもの拳大の円礫が見られた。炉の底面には粘土を貼っている。この粘土は被熱により赤変していた。炉跡で見られた礫は被熱痕が認められたが、炉床からは浮いた状態であり、現位置は保っていないと考えられる。これらの礫は炉の廃棄にともない投棄されたものと判断した。周壁溝内の精査の結果、この溝内には小ピットが多数確認され、屋根の垂木痕と考えられた。また、住居東側部分の主柱穴付近の床面には小ピットが1対見られたことから、東側が入口であった可能性が考えられる。主柱穴や周壁溝内から縄文土器片が出土した。

土坑 S K 17 長軸約2.4m、短軸約1m、深さ約1mを測る不整楕円形の土坑である。土坑内から折り重なるように多数の深鉢や浅鉢などの縄文土器片や石匙・石皿・敲石などの

石器・石製品が出土した。出土した土器から時期は縄文時代中期末の北白川C式のものと考えられる。

溝 S D 66 調査地を北西—南東方向に斜行する溝である。竪穴式住居跡 S H 68の東側で検出した。幅約1m、長さは約18.5mを測る。深さは検出面から約0.25mを測る。埋土中には、子どもの拳大の礫が溝底部から浮いた状態で含まれていた。溝の中から少量の須恵器が出土した。時期は9世紀頃と考えられる。

まとめ 今回の調査では、遺構に伴って縄文時代中期末(北白川C式)の土器が多数出土した。南山城地域の縄文時代の遺跡としては、加茂町の例幣遺跡(恭仁宮下層)で縄文時代前期(北白川下層Ⅱa～c式)の竪穴式住居跡や土坑を検出しており、この遺跡の西方約700mの柿ノ内遺跡では、自然流路内から中期末葉～後期前葉の土器が出土している。また、木津町の燈籠寺廃寺では自然流路に伴って、後期前葉の土器が出土している。一方、城陽市の森山遺跡では、後期中葉～後葉にかけての遺構・遺物が確認されているが、今回のように縄文時代中期末の遺構に伴って遺物が出土したのは稀有な例と考えられる。今回の調査で、調査地の南側は自然流路の存在から遺構は確認できなかったが、扇状地上には縄文時代の集落の広がりが見られる。

新遺跡はこれまで古墳時代後期以降の遺跡とみられていたが、確実に縄文時代中期末まで遡ることが明らかとなった。

(柴 暁彦)

17. ^{かたやま}片山遺跡第3次

所在地 相楽郡木津町大字木津小字片山・池田
 調査期間 平成16年7月8日～11月29日
 調査面積 約1,070m²

はじめに 今回の調査は、「相楽都市計画道路3・2・47号木津駅前東線道路事業」に伴い、独立行政法人都市再生機構の依頼を受けて実施したものである。同事業に伴う発掘調査は昨年度に引き続き実施したもので、今回は第3次調査となる。

調査概要 今回の調査では、昨年度の調査成果を受けて計4か所でトレンチを設定した。このうち、第2・3トレンチでは多大の調査成果あった。

(1)第2トレンチ 正方位を指向する掘立柱建物跡3棟、溝3条、井戸1基、焼土坑3基、柱穴などを検出した。

掘立柱建物跡4 調査区の東端で検出した。桁行4間以上(9.2m以上)、梁間2間(4.8m)を数える南北方向の建物跡である。柱穴は一辺が0.8mないし1.2mを測る方形もしくは長方形の掘形に、直径30～40cm前後の柱痕を確認した。柱穴の多くには柱の抜き取り痕が確認された。

溝S D157 検出長3.5m、幅1.5m、深さ10～15cmを測る。後述する溝S D132の上層に相当し、土層の観察から溝S D132をいったん埋め立てた後、再掘削されたと考えられる。建物跡4に接して検出されたことから、建物跡4の雨落ち溝と考えられる。

溝S D132・161 溝S D132は検出長12.8m、幅0.8m、深さ40cm、溝S D161は検出長13.0m、幅0.8～1.8m、深さ20～50cmを測る。溝S D161は、北側で幅が広がるが、いずれも直線的で、深く掘られている。この2条の溝は、ほぼ並行して検出された。溝の時期は出土した土器から、奈良時代中頃～後半のものと考えられる。

このほか、遺物包含層から平城宮式の軒丸瓦(6291B型式)が出土した。これと同型式の軒丸瓦は、奈良市薬師寺や京都府城陽市平川廃寺などで出土例があり、平城宮の瓦編年の第Ⅱ期(749～757)、奈良時代中頃ものと考えられる。

(2)第3トレンチ 弥生時代後期後半～末の竪穴式住居跡1基・溝1条、奈良時代の流路などを検出した。

竪穴式住居跡S H230 調査区の西端で検出した。一辺4.0～4.3mを測るが、周壁溝が約5～10cm程度が遺存していたに過ぎない。



調査地位置図(国土地理院1/25,000奈良)

流路S D70・73ほか 調査区の西部を、南東から北西に向かって流れている。出土した遺物には、弥生～奈良時代のものが少量含まれているが、主に奈良時代に機能していたと考えられ、中世までに埋没したものと考えられる。

このほか、第2・3トレンチでは、遺物包含層から縄文～弥生時代にかけての石器類や中世の中国製陶磁器・瓦器・土師器などが多数出土した。

まとめ 今年度と昨年度の調査によって、片山遺跡では、縄文時代から中世にかけての遺構・遺物を多数確認することができた。今回の調査成果をまとめると、以下のとおりである。

(1)遅くとも近世には、調査地全体が、耕作地になっていたと考えられる。

(2)中世(12～14世紀)では、遺構は既に削平されていたが、中国製陶磁器や多数の食器、煮炊具が出土したことから、有力豪族の居宅や寺院などが存在した可能性が考えられる。

(3)奈良時代(8世紀)の遺構を多数検出した。これらの遺構の性格については、文字資料が皆無のため不明であるが、建物の規模や正しく南北方向を向くこと、さらに平城宮式の軒丸瓦の出土から、官衙や居宅などの施設の可能性が高いと考えられる。また、第1・3トレンチでも遺物包含層から奈良時代の遺物が多数出土しており、さらに広い範囲にわたって、施設が営まれていたと考えられる。調査地の北西約600mには、平城京の外港である、泉津に関連すると考えられる上津遺跡があり、これとの関連も注目される。

(4)弥生時代後期末の竪穴式住居跡を第2次調査と合わせて3基検出し、さらに関連する遺構や遺物が出土した。調査地周辺には、木津城山遺跡や燈籠寺遺跡など弥生時代後期の遺跡があり、出土した遺物から、これらに後続する集落跡であることが確認できた。

(5)縄文時代の遺構は検出されていないが、遺物包含層から多数の石器・剥片が出土しており、片山遺跡周辺において、縄文時代の人々の営みがあったと推測される。

(筒井崇史)



第2図 第2トレンチ全景(北東から)

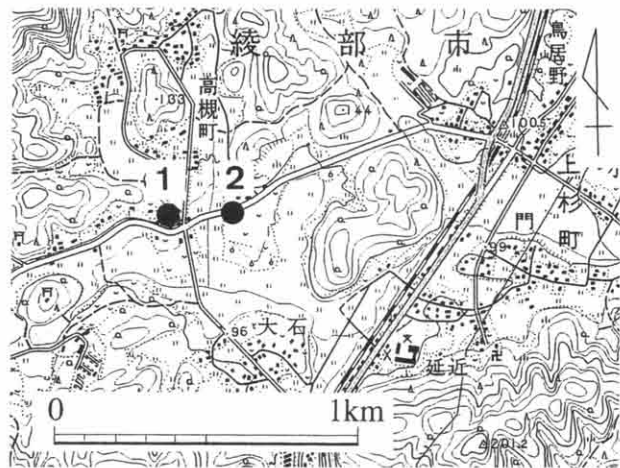
たかつきちやうすやま
101. 高槻茶白山古墳

高槻茶白山古墳は、綾部市の北部、八田川上流域の小盆地に営まれた前方後円墳で、現在の行政区画の上では、京都府綾部市高槻町茶白山・西山に所在する。西から東にのびる丘陵支脈の先端部を整形して営まれた古墳で、周辺の平野部との比高差は8m前後を測る。

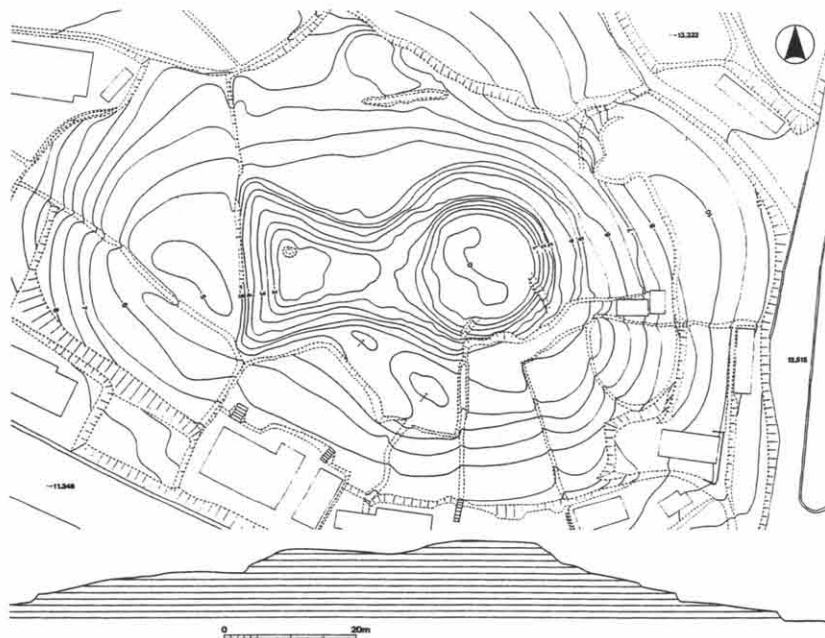
西面する前方後円墳で、墳丘は後円部の左側面が土取りによって一部削られているものの、全体に旧状を比較的良好にとどめている。その規模は、全長54m、後円部径34m、後円部高5.5m、前方部幅30m、前方部高3.5mを計測する。後円部の墳丘斜面には、一連の段築平坦面がめぐっているが、前方部ではそれらしい平坦面は認められないことから、後円部のみ二段築成、前方部は一段築成された古墳と推測される。後円部の断面観察の所見などからみて、古墳は予めほぼ水平な基底面を確保した後、基底部から盛土工法によって築造され、埴輪・葺石などの外表施設については、施工されなかったものと推測される。

築造年代については、墳頂部から出土した古式須恵器の型式から、5世紀末葉頃に求める見解が主流を占めてきた。^(注1)

ところが近年、墳丘の比較研究の成果から、奈良県西殿塚古墳を1/4に縮小したのが高槻茶白山古墳であると見る説が、新たに提示された。^(注2) この見解に従うならば、高槻茶白山古墳は、由良川流域最古の前方後円墳となり、従来の年代観と比較して、絶対年代にして一気に約150年さかのぼることとなる。墳形を採る



第1図 位置図(国土地理院1/25,000梅迫)
1：高槻茶白山古墳 2：野崎古墳群



第2図 高槻茶白山古墳墳丘測量図(注1文献から転載)



第3図 高槻茶白山古墳(左)と西殿塚古墳(右)
(注2文献から転載)

か、墳頂部出土の須恵器を採るか、興味深い研究課題である。

高槻茶白山古墳を訪ねるにあたっては、自動車を駆使して綾部市中心部から国道27号線を舞鶴方面に走行し、綾部市上杉町にある上杉交差点の信号を左折する。綾部市総合運動公園前をやり過ごし、しばらく進むと道は近畿自動車道と立体交差する。この地点は、野崎古墳群の所在地で、昭和61年から62年にかけて、近畿自動車道の建設に伴って発掘調査され、5世紀末葉から6世紀中葉にかけての間に営まれた、前方後円墳1基・円墳5基からなる古墳群が新規に発見された。この野崎古墳群を過ぎて約150m進むと、府道と農道が交差する十字路に至る。高槻茶白山古墳は、この交差点の北西部、人家の裏山の広葉樹が繁茂する森の中にある。

(奥村清一郎)

参考文献

- 注1 奥村清一郎「茶白山古墳」(『丹波の古墳I—由良川流域の古墳—』 山城考古学研究会) 1983
注2 平良泰久「丹波の分割」(『京都府埋蔵文化財論集 第4集—創立20周年記念誌—』 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2001

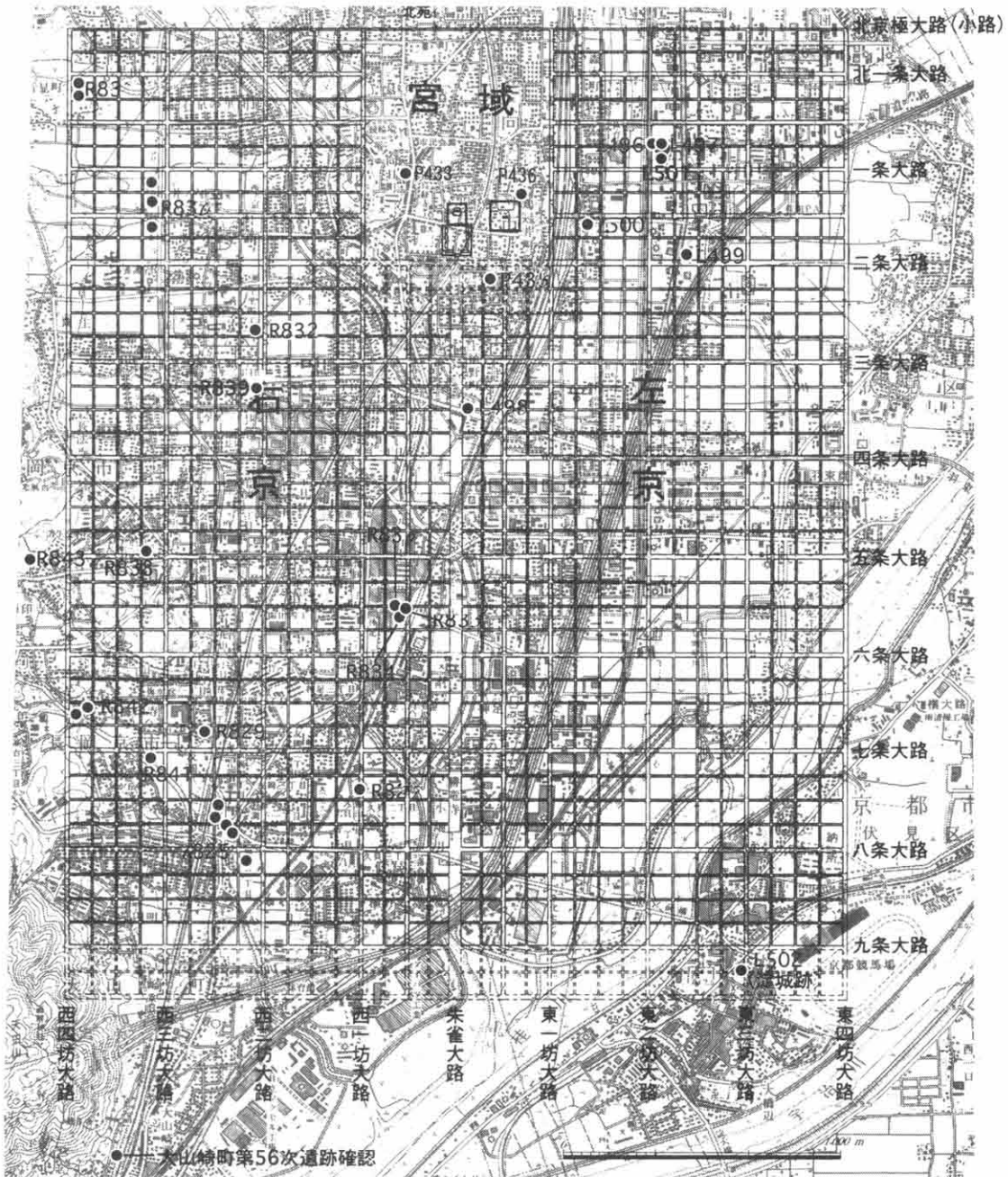


第4図 南から見た高槻茶白山古墳(右が後円部)

長岡京連絡協議会の平成16年10月27日と11月25日・12月15日の月例会では、宮内3件、左京域6件、右京域16件の調査が報告された。京域外の1件を併せると合計26件となる。

長岡京跡発掘調査抄報告

宮域 礎石建正殿と脇殿の「コ」字配置の正庁が想定されている朝堂院北西官衙の東側隣接地の調査(宮内第433次)では、東辺築地は確認されなかったが、西一坊坊間大路の宮内延長道に関



調査地位置図

(向日市文化財調査事務所・(財)向日市埋蔵文化財センター作成の長岡京条坊復原図に加筆)
調査地はPが宮域、Rが右京域、Lが左京域を示し、数次は次数を示す。

連するとみられる南北溝と礫敷遺構の存在が明らかとなった。また、江戸時代の町屋に関連する多様な遺構が良好に遺存し、漆紙文書などの出土と併せ、近世向日町遺跡に関連する資料も得られた。第二次内裏の北東に接する宮内第436次調査では、宮域の整地土の広がりを確認するとともに、西寺所要の軒平瓦を含む、弥生時代から中世にかけての遺物が出土した。

左京域 東院の南に位置する左京第496・497次調査では、東二坊大路と一条条間南小路の側溝を想定位置で確認した。また、両道交差点北東側の一条三坊三町内において、四行八門制に基づく土地班給の先駆的な地割を示す側溝の形状変化を捉えるとともに、縦板組隅柱横棧留形式の井戸や、灰穴炉などがこれら条坊側溝に近接するように検出され、当地の耕作地への変移が平安末期にまで下る可能性が明らかとなった。一町南の左京第501次調査では、縄文時代晩期の遺物を包含する湿地状堆積の上面で長岡京期の掘立柱建物跡・柵・溝が確認された。このうち東西方向の溝は一条大路北側溝とみられ、内部から工房的な施設の存在を示唆する桜皮や漆の付着した須恵器・削り屑などが出土した。左京二条三坊五町の中心付近で実施された左京第499次調査では、二条大路に北面する一町占地の宅地内の東西中軸における建物配置が明らかになるなどの重要な成果があった。特に長岡京期の遺構として、町内中軸に位置する大形の三面庇を備えた東西棟の掘立柱建物跡をはじめとして、井戸や土坑・溝などが検出され、以前に西側で確認されていた南北棟建物跡を含めて整然と配置された宅地内中心建物群を構成する一画である可能性が高まった。また、二条大路に面する遮蔽施設(築地)の内溝と考えられる東西溝からは、供宴後に廃棄された供膳具を主体とする土器類や炭が多量に出土した。建物は檜皮葺の可能性が高く、古式の緑釉陶器(壺)の出土などから、三位以上の貴族邸宅の候補になりうる内容をもつものと評価される。

右京域 右京第829次調査では、本号にも報告されているが、調査区中央を東西流する開析谷を挟んだその南北で、掘立柱建物跡や柵・溝・井戸などが検出された。多くは平安時代後期～鎌倉時代に属すが、東西主軸の溝の中には長岡京期や飛鳥時代に遡るものもある。今里車塚の北西に接する右京第832次調査では、旧石器時代から長岡京期にかけての多様な遺構・遺物が検出された。調査地内を斜向する自然河道からは、ナイフ形石器や縄文土器が出土した。古墳時代では、庄内併行期の土器が一括投棄された土坑が、6世紀前半期の竪穴式住居跡3基・土坑などとともに検出された。また、調査地の東端で今里車塚古墳の周濠の内傾斜面上縁が確認され古墳の西への広がりが確認された。このほか掘立柱柱穴が多数あり、建物として復原できた2棟のうち、2間×2間の総柱建物跡は飛鳥時代に遡る。また、長岡京期の三条条間南小路の北側溝も確認されている。推定石見城跡西側の右京第831次では、これまでに古墳時代の溝(前期の流路と後期の古墳周溝)や長岡京期の掘立柱建物跡2棟、平安時代後期の鉄小刀と土師器皿が副葬された墓のほか、中世の屋敷に関連する遺構が密集して検出されている。屋敷地は、門を開く掘立柱塀(南面)と柵を伴う濠(北西)で囲画され、その内部には掘立柱建物跡や井戸・廃棄土坑などがある。出土遺物などから、13世紀前半から16世紀に居住域が継続的に営まれていることが判明した。

(伊賀高弘)

センターの動向(04.11～05.01)

1. できごと

11. 2 京都府職員人権研修(於：京都市)
水谷壽克調査第1課課長補佐、竹井治雄・岡崎研一専門調査員、石崎善久・高野陽子・筒井崇史調査員、北邑靖史主査、鍋田幸世主事出席
- 5 長岡京跡右京第830次・上里遺跡(長岡京市)現地説明会
池尻遺跡第5次(亀岡市)発掘調査終了(9.6～)
全国埋蔵文化財法人連絡協議会近畿ブロックOA委員会(於：京都市埋蔵文化財研究所)辻本和美資料係長出席
- 6～7 日本考古学協会大会(於：広島市)
筒井崇史調査員出席
- 9 時塚遺跡第8次(亀岡市)関係者説明会
- 12 増田富士雄理事案察使遺跡現地視察
平成16年度人権研修会(於：京都市)杉江昌乃総務係長、辻本和美資料係長出席
- 15 井上満郎理事片山遺跡現地視察
教育庁役付職員人権問題研修(於：京都市)長谷川達調査第2課長、水谷壽克調査第1課課長補佐出席
- 16 長岡京跡右京第840次(第二外環)(長岡京市)発掘調査開始
- 17～19 埋蔵文化財発掘技術者専門研修「遺物観察・構造調査課程」(於：独立行政法人文化財研究所奈良文化財研究所)中川和哉主任調査員参加
- 18 時塚遺跡第8次、発掘調査終了(8.2～)
- 19 恭仁宮跡調査委員会(於：加茂町)森下衛調査第1課長出席
- 24 府庁事務局財政援助団体監査
- 25 長岡京連絡協議会(於：当センター)
案察使遺跡第6次(亀岡市)関係者説明会
時塚遺跡第10次(亀岡市)発掘調査開始
- 26 園部城跡第6次(園部町)関係者説明会
案察使遺跡第6次、発掘調査終了(7.16～)
- 27 片山遺跡第3次(木津町)現地説明会
- 29 諸畑遺跡第3次(八木町)現地説明会
片山遺跡第3次、発掘調査終了(7.8～)
- 30 園部城跡第6次(園部町)発掘調査終了(10.13～)
12. 1 内田山古墳・内田山遺跡(第5次)(木津町)発掘調査開始
時塚遺跡第10次、発掘調査開始
- 2 長岡京跡右京第841次(第二外環)(長岡京市)発掘調査開始
- 4 岡ノ遺跡第3次(福知山市)現地説明会

- | | |
|--|---|
| <p>7 馬路遺跡第4次(亀岡市)発掘調査開始</p> <p>8 中谷雅治理事薪遺跡第6次現地視察</p> <p>10 上原真人理事、高橋誠一理事池尻遺跡第7次現地視察</p> <p>13 車塚遺跡第7次(亀岡市)発掘調査開始</p> <p>15 長岡京連絡協議会(於：当センター)</p> <p>16 第72回役員会・理事会(於：ルビノ京都堀川)上田正昭理事長、杉原和雄常務理事・事務局長、都出比呂志、中谷雅治、増田富士雄、上原真人、下田元美(代理高田参事)、小池久各理事出席</p> <p>20 薪遺跡第6次(京田辺市)現地説明会
田辺城跡第25次調査委員会(於：舞鶴市)水谷壽克調査第1課課長補佐出席</p> <p>21 上田正昭理事長池尻遺跡第7次現地視察
難波野条里制遺跡(宮津市)関係者説明会</p> <p>22 薪遺跡第6次、発掘調査終了(9.21～)
長岡京跡右京第829次・友岡遺跡(長岡京市)発掘調査終了(7.5～)</p> | <p>1. 6 上安久城跡(舞鶴市)発掘調査開始
長岡京跡右京第829次・友岡遺跡(長岡京市)関係者説明会</p> <p>13～14 埋蔵文化財担当職員等講習会(於：静岡県)森下衛調査第1課長、小池寛調査第1係長出席</p> <p>14 小池久府文化財保護課長池尻遺跡ほか現地視察</p> <p>17 職員研修(於：当センター)講師：(財)京都工場保健会梶岡恵子保健師「生活習慣病と検診結果」</p> <p>18 京丹後市遺跡整備検討委員会(於：京丹後市)長谷川達調査第2課長出席</p> <p>21 長岡京跡右京第829次・友岡遺跡(長岡京市)発掘調査終了(7.26～)</p> <p>25 平成16年度人権に関する職場研修(於：京都府乙訓総合庁舎)杉江昌乃総務係長、今村正寿主任、小山雅人調査第2課総括調査員、伊賀高弘主査調査員、村田和弘・福島孝行・高野陽子調査員出席</p> <p>26 長岡京連絡協議会(於：当センター)</p> <p>28 岡ノ遺跡第3次(福知山市)発掘調査終了(5.13～)
中尾芳治副理事長池尻遺跡第7次現地視察</p> |
|--|---|

【お詫びと訂正】前号第94号に以下の誤植がありましたのでお詫びして訂正いたします。

頁	場所	誤	正
37	第1図の凡例	1/25.000	1/25,000
38	参考文献の著者名	樋口隆久	樋口隆康

編集後記

今年度の最終号となります第95号をお届けします。

京丹後市の奈具岡遺跡は、平成4年と同7年に行われた発掘調査によって、弥生時代中期の大規模な玉作り遺跡であることが明らかになりました。同遺跡から出土した玉関連など弥生時代の一括遺物は、昨年度、国の重要文化財に指定されました。本号では、指定に伴って実施した玉関連遺物の再整理の成果についての報告を掲載しました。

奈具岡遺跡では、緑色凝灰岩や水晶を原料として玉の製作を行っていました。原石を加工・研磨し、さらに直径数mmの孔を穿つ一連の工程は、現在の技術をもってしても難しい作業と思われれます。玉作りに必要な根気と辛抱強さは、雪深い冬の丹後のきびしい自然が生み出したのかも知れません。

(編集担当=辻本和美)

京都府埋蔵文化財情報 第95号

平成17年3月31日

発行 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター

〒617-0002 向日市寺戸町南垣内40番の3
Tel (075)933-3877(代) Fax (075)922-1189
<http://www.kyotofu-maibun.or.jp>

印刷 三星商事印刷株式会社

〒604-0093 京都市中京区新町通竹屋町下ル
Tel (075)256-0961(代) Fax (075)231-7141



KYOTO
ARCHAEOLOGY CENTER